飯山市埋蔵文化財調査報告　第39集

上野遺跡 V

UENO SITE

1994・3

長野県飯山市教育委員会

飯山市埋蔵文化財調査報告　第39集

上野遺跡 V

UENO SITE

1994・3

長野県飯山市教育委員会

序

飯山市教育委員会
教育長　岩　崎　彌

飯山盆地の中央を悠々と流れる千曲川は、太古の時代より多くの恵みをわたくしたちに与えてくれています。とくに常盤地区上野・大倉崎丘陵や瑞穂関沢地区周辺の千曲川河岸には数多くの遺跡が存在し、往時より千曲川との密接な関係が指摘されています。

昭和63年および平成元年に実施された国道117号線小沼・湯滝バイパス建設に伴う発掘調査では、旧石器時代～中世館跡まで連綿として生活が営まれた痕跡が、瑞穂・常盤両地区で発見されました。殊に常盤上野遺跡では約12,000年前以上から500年前までの大規模な集落が断続的に営まれたことが判明いたしました。以降、平成２年・４年にも調査が行われ、それぞれ貴重な先人の生活跡が発見されました。上野地区はまさに古代遺跡の宝庫といえる場所であります。

平成５年５月、長野県飯山建設事務所の計画したチェーン着脱場建設に伴い事前の緊急調査を実施することになりました。調査にあたっては、高橋桂調査団長をはじめ地元上野区の多大な御協力をいただきました。また、多くの作業員の方に参加・ご協力いただき実施することができました。

ここに所期の目的を達成することができ、御協力いただいた皆様に感謝申し上げるとともに、本報告書が多くの市民の皆様に読まれ、郷土を知る資料となることを念願し序といたします。

平成６年２月１日

例　言

1　本書は、長野県飯山市大字常盤3921-13番地ほかに所在する上野遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2　今回検出された遺跡は、旧石器・縄文・弥生・平安の各時代であるが、中心は弥生時代の木棺墓群と、平安時代の集落址である。

3　調査は国道117号線バイパスチェーン着脱場建設工事に伴う発掘調査で、飯山市教育委員会が平成5年5月20日から7月30日まで実施した。

4　上野遺跡は過去に4回の調査報告がなされている（飯山市教育委員会『小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ』1989・同Ⅱ1990・同『上野遺跡』1991・同『上野遺跡Ⅳ』1994）ので、本報告は上野遺跡Ⅴとして報告する。

5　発掘調査は以下に掲げる組織で実施した。

飯山市遺跡調査会

顧　　問	小山　邦武	市　長
会　　長	福沢　裕文	市教育委員長(退任平成5年10月11日)
	滝沢藤三郎	〃　(就任平成5年10月12日)
副 会 長	長谷川元一	市社会教育委員会長
委　　員	高橋　桂	市文化財保護審議会会長
	田中　広司	市議会総務文教委員長
	中村　敏	市公民館長
	岩崎　彌	市教育委員会教育長
事務局長	月岡　久幸	市教育委員会教育次長
事務局次長	今清水豊治	市教育委員会社会教育係長
事務局員	望月　静雄	市教育委員会社会教育係

地元関係者

常盤公民館長	鈴木　昭悟
上野区長	小林精一郎
同副区長	中原　信
道路委員	中原　正司
用水委員	小林　佑幸
上野の森の会	中原　道雄・中原　信・富岡　太重

調 査 団

団　　長	高橋　桂	飯山北高等学校教諭
調査主任	常盤井智行（常盤）	
調 査 員	田村　浸城（外様）	小林　新治（飯山）
	桃井伊都子（上倉）	小川ちか子（大深）
	望月　静雄	飯山市教育委員会事務局員

作業参加者（順不同）

小出まさ子（上野）　鈴木操・鈴木ため（大倉崎）　大森信衛・竹内大五郎・北條辰男・小林経雄・樋山巌・石沢悦次・中島進（戸狩）　樋口栄（温井）　鷲野吉太郎（関沢）　吉越まさの（大塚）　高橋喜久治（下水沢）　岸田昇（山口）　岸田志づ子（藤ノ木）　大日方泰夫（戸隠）　斉藤和子（県町）　土屋久栄（伍位野）　井上弘之（下木島）　田中桂（大学生）　高橋茂喜・町井英明（高校生）

整理参加者

小林みさを（柏尾）　小林光子（小境）

6　本書で使用された方位は真北であり、地区割りは国土座標第８系に準じている。

7　本書に掲載した平安時代の土器・陶器のスクリーントーンは、黒色処理および灰釉施釉部分を表わす。また断面黒塗りは須恵器を、断面アミ目は灰釉陶器を示す。

8　発掘調査にあたっては県文化課小池幸夫・春日雅博両氏にご指導を賜った。記して感謝申し上げる。

9　本書の編集は常盤井が主体となり、望月が補佐し、高橋が統括した。文責は目次に記した。

10　発掘調査の図面・出土品は、市内大深の市埋蔵文化財センター（旧三中寄宿舎）で保管している。

目　次

序
例　言
第1章　調査経過 …… 1
　1　調査に至る経過 …… 望　月 … 1
　2　調査経過 …… 小　林 … 1
　　A　発掘調査 …… 2
　　B　調査日誌抄 …… 2
第2章　遺跡の概要 …… 小　林 … 6
　1　遺跡の位置と環境 …… 6
　　A　地理的環境 …… 6
　　B　歴史的環境 …… 6
　2　上野遺跡の概要と過去の調査 …… 8
第3章　旧石器時代 …… 望　月 … 20
　1　層序と遺物の出土状態 …… 20
　　A　層序と文化層 …… 20
　　B　地点分布 …… 23
　2　出土遺物 …… 28
第4章　弥生時代 …… 33
　1　遺　構 …… 33
　　A　木棺墓・土坑墓 …… 常盤井 … 33
　　B　掘立柱建物址 …… 田　村 … 35
　2　出土遺物 …… 桃　井 … 45
　　A　土　器 …… 45
　　B　石製品 …… 48
第5章　平安時代 …… 53
　1　遺　構 …… 53
　　A　竪穴住居址 …… 常盤井 … 53
　　B　掘立柱建物址 …… 田　村 … 54
　2　出土遺物 …… 常盤井 … 60
　　A　土　器 …… 60
　　B　土製品・石製品 …… 61
第6章　縄文時代・中世 …… 田　村 … 65
　1　縄文時代 …… 65
　　A　遺　構 …… 65
　　B　出土遺物 …… 66
　2　中　世 …… 67
第7章　まとめ …… 高　橋 … 68

第1章　調査経過

1　調査に至る経過

平成3年12月、一般国道117号線小沼・湯滝バイパスが湯滝～大倉崎まで供用開始したことに伴い、付近の交通事情は大きく様変わりした。特に多雪地である当地域にはスキー場が多くあり、そのため県外からも車による多くの入り込みがある。長野県飯山建設事務所はこうしたことから常盤上野地区内にチェーンの着脱場を建設することを計画し、平成4年9月25日、飯山市役所建設課を通して市教委に埋蔵文化財の取扱いについての照会があった。上野地区には、昭和63年・平成元年と二年に亘るバイパス敷設に際して調査を行ってきた大規模な上野遺跡が存在している。今回の予定地は、旧石器時代・弥生時代の遺構が発見された隣接地にあたっていた。そのため、予定地の変更が難しい以上、事前の発掘調査の必要があると回答した。また、今年度着手できないかと要望を受けたが、積雪時期に向かっているため無理と判断し、次年度実施したい旨報告した。

平成4年10月22日、県文化課の小池指導主事に出席いただいて、飯山建設事務所・市役所建設課・市教委で現地協議を実施した。その結果、遺跡の中心地と思われ、加えて旧石器・縄文・弥生・古墳・平安の各時代にわたる複合遺跡のため全面調査が必要であるとの判断となった。ただし、設計図面が未完成のため明確な工事面積は不明であり、面積が確定した段階で正式に積算することとした。また、発掘地は用地買収、墓地・倉庫移転、雑木伐木が未了であったため、工事主体者の希望する7月末までに発掘調査完了するためには、面積が1800㎡とすればおおよそ45日間の発掘期間が必要となる旨の要望も行った。

11月4日　県教委より「国道117号線環境整備事業（チェーン着脱場建設）に係る上野遺跡の保護について」の通知がある。飯山建設事務所の負担で、委託された飯山市教育委員会が調査を実施する。計画及び予算は設計が固まった段階で飯山市教育委員会が作成する、という内容であった。

平成5年4月10日　飯山建設事務所長より、法第57条の3による埋蔵文化財発掘通知が提出される。面積が確定したので、1600㎡を調査対象とした積算書を作成し飯山建設事務所に提出する。

4月20日　飯山市教育委員会教育長名で、法第98条の2による埋蔵文化財発掘調査の通知を提出する。

5月14日　飯山建設事務所長（青木常男）と飯山市長（小山邦武）との間で発掘調査契約書を取り交わす。5月20日に発掘調査を開始する予定とし、直ちに準備を行った。

2　調査経過

A　発掘調査

この発掘調査対象地は、国道117号線沿いに新設されるチェーン着脱場で、面積約1600㎡を平成5年5月20日から7月30日まで約2箇月余の発掘調査であった。

大地区割については、前回117号線拡幅部分と工場団地取付道路部分の発掘調査（1992）のときに設定した100ｍ方眼で50区画の大地区割を用いた（図1）。

今回は、28・29区と33・34区内で調査を行なった。

また、大地区内の地区割についても前回に従い5ｍ方眼とし、南から北へ1～20、西から東へA～Tの番号を付した（図5）。従って調査日誌抄の中では、各グリットをA－1またはT－20というふうに記した。

調査方法は、原則として表土剥ぎ、精査、写真撮影、遺構掘り、測量、遺物の取り上げの順で行なった

が、排土処理の都合上調査地を東西に二分し、一方を土置場として半分ずつ調査した。遺構・遺物の検出は移植ゴテで慎重に行なったが、遺物は黒色土の中間層からの検出が多く見られた。黒色土中の遺構掘りこみ面の検出にあたっては、遠宜土層セクション帯を残すなど土層観察を試みたが、判明するに至らなかった。黒色土中の遺構検出については前回同様今後の検討課題の一つである。

遺構の掘り下げは移植ゴテを用い慎重に掘り下げを実施した。写真撮影は白黒フィルム35ミリとカラースライドフィルム35ミリフィルムで適時撮影した。測量は、遺構全体図は40分の1平板測量図を作成した。また住居址・木棺墓など主要遺構とともに、土器・礫群の出土遺物についても適時に10分の1または20分の1の徴細図を作成した。

遺構番号は前回までの付番の次の番号から通番とした。遺構の略称については、土坑はSK、掘立柱建物はSBとし、竪穴住居址は古墳時代以降であるため、前回にならいH32住のようにした。竪穴住居址を除き時代別に分けていない。

遺物の取り上げは、遺構出土のものは遺構毎に、また、包含層のものは各グリット毎に取り上げたが、石器・礫・縄文土器については1点毎に位置と高さを測って取り上げた。

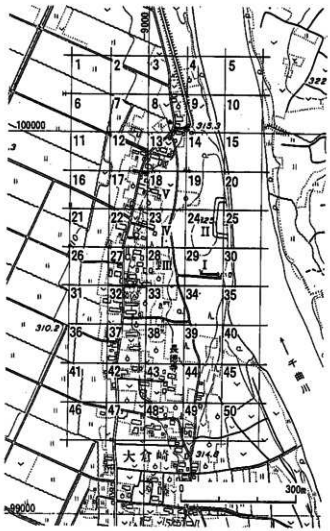


図1　上野遺跡大地区割　1:10000

上野遺跡の基本的な層序は、上位から黒色腐植土（表土厚さ約20cm）、黒色土（厚さ約30cm）、茶褐色土（漸移層厚さ約10cm）、黄色粘質土（ソフト厚さ約10cm）、黄褐色粘質土（下層に近づくに従い褐色味と硬さが増す・厚さ約25cm）、黄褐色粘質土（上部より黄味が強く硬い。また、粘性も強く所々ブロック状となっている。厚さ約5～10cm）である。また、溝状土坑の深さと黒色土層から弥生時代の土器の出土を考えると、縄文時代以降の遺構切りこみ面は黒色土層内にあるものと思われる。ただし遺構確認は漸移層最上部での確認となった。また、石器・礫の検出層位は黄色粘質土の上部から漸移層にかけてである。

B　調査日誌抄

平成5年

4月15日（木）　飯山建設事務所と現地協議。発掘工程等を協議する。
5月10日（月）　コンテナハウスの設置場所・残土置場・残木処理等の検討。
5月14日（金）　上野区長を通じ、地元関係者との調整会議開催及び発掘作業員の募集開始。
5月17日（月）　調査区内の残木処理。コンテナハウス等の設置。
5月18日（火）　重機による表土除去。
5月19日（水）　調査区内の基準杭打ち等準備作業。発掘調査開始式準備。

5月20日（木）　発掘調査開始式開催。調査区（28区・29区）の北端から発掘調査開始。弥生土器を中心に出土し始める。

5月21日（金）　29区Ａ－３で溝状土坑２本検出。

5月25日（火）　28・29区のジョレンがけ精査は、おおむね黄色土層まで下がる。遺構判明し始める。33・34区のジョレンがけ精査開始。Ｔ－20（ＳＫ55）Ａ－18（ＳＫ56）の土器溜り検出。出土状態写真撮影後遺物回収。29区Ａ－１木棺墓木口痕跡あり。供献土器等上面になし。33区Ｓ－20弥生壺略完形品出土。

遺構掘り下げ

5月26日（水）　遺構掘り下げ。遺構は平面輪郭が不明瞭なものの、木棺墓らしいものと、掘立柱建物の柱穴が多い。

5月27日（木）　遺構掘り下げ続行。木棺墓が多い。ＳＫ57（Ｓ－２）から弥生小型坏、ＳＫ63（Ａ－19）から弥生壺出土。常盤小６年生33名発掘体験学習（午前中）。

5月28日（金）　28区内の掘立柱建物は平安時代、西側に廂の柱穴あり。遺構掘り続行。野沢温泉村遺跡発掘調査団一行視察。

5月31日（月）　北端から20グリットまで再度ジョレンがけ精査。Ｓ－３で溝状土坑１基検出。Ａ・Ｔ－20で木棺墓検出。遺構掘り続行。ＳＫ67壺、ＳＫ57土器出土状態写真撮影。

6月３日（木）　ジョレン精査、遺構掘り続行。Ａ－18東端部で礫群検出。

6月７日（月）　新たに木棺墓数基検出。

6月８日（火）　18グリット以南15グリットまで、ジョレンがけ精査と遺構掘り。Ｓ・Ｔ－18～19内の柱穴は、南北棟の掘立柱建物に思われる（ＳＢ12）。Ｔ－17内の円形ピットは掘立柱建物になるもよう。Ｂ－14内で銭貨「天禧通寶」１枚出土。県文化課小池・春日両氏視察。

6月11日（金）　Ａ－18内で旧石器彫器１点出土。Ａ・Ｓ－18内で木棺墓各１基検出。平板による遺構全体測量（Ａ・Ｔ・Ｓの20グリット以北）。常盤小郷土探検クラブ（４～６年生）10名、発掘体験学習（放課後）。

6月14日（月）　Ｂ－12グリット内で銭貨「熙寧元寶」１枚出土。

6月16日（水）　木棺墓実測続行。Ｓ・Ｔ－20内で木棺墓４基検出。14グリット以南12グリットまでジョレンがけ精査続行。

写真撮影に向けて石器群の清掃

6月24日（木）　Ｂ－12・11グリ

ット内旧石器調査、黒曜石２点、影器１点検出。Ａ－１・Ｂ－18礫群実測。平板による遺構測量。

６月25日（金）　掘立柱建物（ＳＢ12・13・14）完掘写真。Ｂ－11・12内旧石器調査地掘り下げ完了。写真撮影、礫群分布実測。

６月28日（月）　以上で、調査予定地東半分の調査を終る。西半分の表土除去開始（～29まで）。

６月30日（水）　地区割り杭打ち、基準杭打ち開始。28区北端部からジョレンがけ精査開始。

７月１日（木）　地区割杭、基準杭設置完了。Ｒ－２・３内溝状土坑（ＳＫ112）検出。

７月２日（金）　Ｑ－２・３内溝状土坑（ＳＫ113）検出。

７月６日（火）　Ｒ－19・20内木棺墓検出。遺構掘り下げ開始。

７月８日（木）　Ｑ・Ｒ・Ｓ－18～16グリット内で木棺墓数基検出、上面輪郭写真撮影、遺構掘り下げ。木棺墓（ＳＫ125）から大型管玉２点検出。

７月９日（金）　Ｒ－17内掘立柱建物検出（ＳＢ15・16）。Ｓ18～17内土坑（（ＳＫ123・124）の土器出土状態写真撮影。

７月10日（土）　遺構掘下げ続行。午後現地見学会開催（常盤公民館と共催）。

７月13日（火）　33区Ｓ・Ｔ－13～10ジョレンがけ精査。Ｓ・Ｔ－12内平安時代の方形竪穴住居跡の輪郭を検出。Ａ－10内で安山岩剝片検出。木棺墓実測。

７月15日（木）　Ａ－11内礫群検出。Ａ－10内溝状土坑検出。

７月16日（金）　14グリット以南

発掘作業風景―白い札の所が土器出土地点

常盤小郷土探険クラブ発掘体験

ジョレンがけで遺構検出

の掘立柱建物（ＳＢ17）・住居址等の遺構検出状態写真撮影。Ｓ－14内で住居址（Ｈ33）の側壁・貼床の一部とカマド確認。攪乱激しい。

７月22日（木）　平板による遺構全体実測、14グリットから10グリットまで。Ｈ33号住居址の輪郭確認。大型住居となる。溝状土坑１基Ｈ33号住居址の北西の隅で検出。

７月26日（月）　Ｓ－15内溝状土坑検出。旧石器調査Ａ・Ｂ－13～11内。木棺墓・溝状土坑の遺構実測。

７月29日（木）　Ａ－11内礫群完掘写真撮影。平板による遺構全体実測完了。午後５時より発掘調査終了式を上野公民館に於て行なう。

７月30日（金）　ピット内遺物、礫群とり上げ完了。コンテナハウス引越し準備、杭ぬき等残務整理を行ない現地調査は全部終了した。

発掘現場見学会

第2章　遺跡の概要

1　遺跡の位置と環境

A　地理的環境

上野遺跡は、長野県飯山市大字常盤字外和柳ほかに所在している（図2）。

長野市からＪＲ飯山線で、千曲川沿いに下り、飯山駅を通過して二つ目のところが信濃平駅で、この駅の東側平坦部一帯が千曲川の氾濫堆積物によって形成された常盤平である。一面に水田が広がり、外様平と並びこの地方最大の穀倉地帯で、飯山盆地の中央に位置する。西側には遺跡群・古墳群を有する長峰丘陵が南北に走り、これを越えると外様平が開け、更に盆地の西縁は鍋倉山（1288.6m）等比較的低い関田山地となり、越後との国境である。この山地には「塩の道」と呼ばれる幾筋かの交易道がブナ・雑木林の中に存在する。

常盤平の東側は千曲川の悠久の流れを擁し、更に飯山盆地東縁にあたる毛無山（1640.98m）等三国山脈の山なみが聳え、南は飯山市街地、北は大深の集落で画され、この平の東端部に千曲川に添う形で上野遺跡の所在する上野丘陵（この地方では、上野の森とも呼んでいる）がある。

この丘陵は、南北1.5km、東西0.5kmの細長い残丘状を呈し、東側は千曲川の浸触により断崖となり、西側は、ゆるやかに傾斜し常盤平に広がり、上野区の集落が点在している。

この丘陵上に広がる上野遺跡は、大倉崎遺跡（縄文時代）の北側にあたり、丘陵全体が遺跡と考えられている。標高約332mの小丘陵には、ブナ・ナラ等の大木が林立、森を形成して低地には見られない山ゆり・リンドウなどが植生している珍らしい場所といえる。また、西斜面の所々に湧水が認められ、山菜やヤブコウジの赤い実が、住む人の気持を和らげるとともに、自然の恵みを太古から人々に与えてくれたところでもある。

平成4（1992）年国道117号線の開削により、緑と遺跡が半減するなどその姿が大きく変りつつあることは、地域発展の道路のこととはいえ、誠に残念と言うほかはない。近い将来に於て、この上野の森の景観保持、植生への影響調査、加えて遺跡保存など積極的な対策が待たれるところである。

B　歴史的環境

この遺跡の所在する上野丘陵周辺には、数多くの遺跡が存在している。分布については、必ずしも明確に把握している訳ではないが、以下明らかなものについて時代別に述べてみることにする（図3）。

(1)　旧石器時代

この地域は、関沢(14)、太子林(15)など旧石器時代の遺跡が、飯山地方では最も多く分布することが認められているところである。特に昭和63年調査の日焼遺跡からは、この時代の良好な石器群が検出されている。

河岸段丘上に分布していることからしても千曲川との密接な関係をうかがい知ることができる。

なお、西の長峰丘陵上の大塚(31)、尾崎南(38)もこの時代の遺跡である。

(2)　縄文時代

この時代における飯山地方初期の遺跡は、北竜湖遺跡で、上野遺跡東方約2.5km地点に所在し、草創期・早期に位置づけられる表裏縄文土器が出土している。

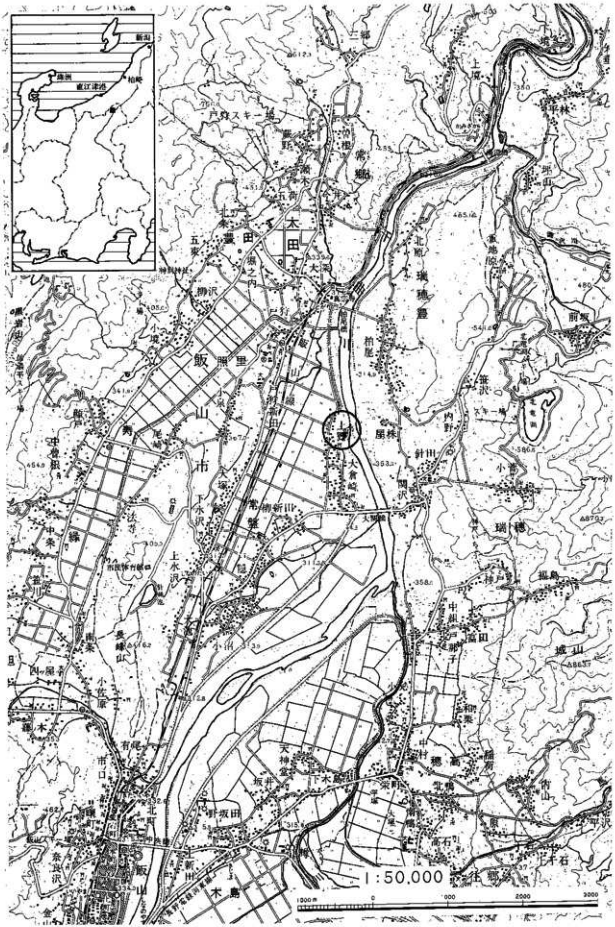


図2　上野遺跡の位置

前期の遺跡には、大倉崎(6)、太子林(15)、瀬谷(7)、岡峰(24)などがあり、中期では、蓮華文などを特徴とする北陸系の土器片が採集されている上ノ原遺跡が挙げられる。

また、後期の遺跡として重要なのは、宮中遺跡で、昭和55年調査の際石棺墓23基が検出されている。なお、飯山盆地西縁の関田山地東麓には、中・晩期の柳沢A(41)、をはじめ晩期の遺跡が点在している。

(3) 弥生時代

この地方において、長峰丘陵上の諸遺跡（24～40）はこの時代の遺跡として著名である。特に小泉遺跡(35)からは、過去3回の発掘調査の際弥生中・後期の大集落跡や、中期の木棺墓群などが検出されている。

上野遺跡でも住居址や土器片なども出土しているとともに、照丘遺跡(27)からは中期の栗林式土器や木製品等が出土している。

(4) 古墳時代

現在、上野古墳(4)をはじめ、尚峰古墳群(16)・長峰丘陵上の古墳群（27・28・32）が確認されている。上野遺跡では北陸系の土器を伴った前期の竪穴住居址と方形周溝墓が検出されている。

(5) 古代・中世（奈良時代以降）

飯山地方においては、奈良時代に比定できる遺跡は発見されていない。平安時代の遺跡は屋敷(17)、大倉崎II(5)などがあげられる。また、関田山地東麓に柳沢(44)をはじめ多くの遺跡が点在しているが、平安時代末から中世にかけては判然としない部分が多い。

ここ上野遺跡では、集落跡や墓址などが検出されている。

城館跡については、対岸の瑞穂地区と関田山地東麓に多く点在している。その中にあって千曲川にのぞむ位置にある大倉崎館跡は注目されるところである。

参考文献

飯山市教育委員会　1986『飯山の遺跡』
飯山市教育委員会　1990『小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告書II』
飯山市・飯山市誌編纂委員会　1991『飯山市誌自然環境編』
飯山市教育委員会　1994『上野遺跡IV』

2　上野遺跡の概要と過去の調査

上野遺跡は、常盤平の東端部にあたり標高約322m、東西に約500m南北に約1,500mの上野丘陵上にあって、丘陵全体にその広がりを見せている。

千曲川左岸に接するこの丘陵東側は比高10～15mの段丘崖を有し、西側は緩やかに傾斜し常盤平（旧氾濫源）に接している。この緩斜面にある畑地の表面に遺物が散布していることや、丘頂に古墳のあることは、古くから知られており、また、丘陵北端部に雄大な濠を巡らした「お城跡」(大倉崎館跡)のあることも『村史ときわ』などに紹介されている。古墳は丘陵のほぼ中央で1基確認されている。なお、平成元(1989)年の発掘調査により、複合遺跡であることが確認された。

この遺跡は、市内の遺跡でも第一級と目されていたが、昭和63年から平成3年にかけての国道117号線（小沼・湯滝バイパス）建設工事によって、東西に分断されてしまったのである。

以下、調査年次を追いながら過去の調査について記す(図4)。

昭和63(1988)年　大倉崎館跡の発掘調査が実施され、幅10m以上深さ5m以上の雄大な空壕を有する鎌倉・室町時代（14・15世紀）の館であることを確認。出土遺物の中には輸入磁器の食器類、越前・珠洲焼の大甕、瀬戸・美濃系の香炉、風炉などや銭貨もあり、県内でも貴重な中世の館跡であることが判明し、中世史を解明する上で重要な資料が得られた。

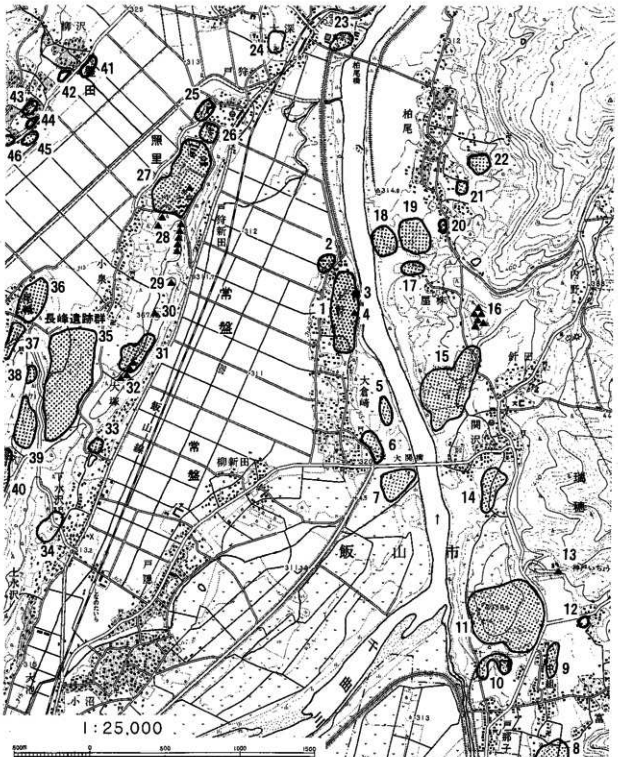


図3　周辺の遺跡分布図（1:25,000）

1.上野　2.上野II　3.大倉崎館　4.上野古墳　5.大倉崎II　6.大倉崎　7.瀬附　8.尾崎　9.城の前　10.千苅・犬飼館　11.宮中　12.狼飼田　13.飯綱堂古墳　14.関沢　15.太子林　16.向峰古墳群　17.屋株　18.日焼　19.南原　20.堺ノ沢　21.柏尾南館　22.上ノ原　23.真宗寺　24.岡峰　25.旧照里小学校　26.光明寺前　27.照丘　28.照里古墳群　29.30.茶臼山古墳　31.大塚　32.大塚古墳群　33.水沢　34.下水沢　35.小泉　36.柳町　37.山崎　38.尾崎南　39.東長峰　40.西長峰　41.柳沢A　42.柳沢B　43.鶏屋敷　44.桜沢　45.小境　46.押出

平成元(1989)年　国道117号線バイパス路線約500ｍ間の発掘調査を行ない、全面から旧石器から平安までの各時代にわたる遺構・遺物が検出され、複合遺跡であることが確認された。

〈遺構・遺物の検出概要〉

旧石器時代　石器集中地点5箇所・玉髄製品など。

縄文時代　溝状土坑、深鉢形土器など。

弥生時代　中・後期の竪穴式住居址、木棺墓群、掘立柱建物、甕・壺など。

古墳時代　前期の竪穴式住居址・方形周溝墓(北陸色の極めて強い土器を伴っていた)ほか。

平安時代　住居址、土坑墓、鍛冶遺物など。

平成2(1990)年　この丘陵のほぼ中央を東西に横断する市道7-335号線の拡幅改良に伴なう調査がなされ，旧石器時代のナイフ形石器、石核、弥生時代の掘立柱建物や弥生式土器、平安時代の竪穴式住居・土師器などが検出された。

平成4(1992)年　戸狩工業団地への取付道路として、市道7-334号線の拡幅改良工事並びに国道117号線バイパス拡幅工事のための発掘調査が実施された。ここにおいても旧石器・縄文・弥生・平安各時代の遺構・遺物が検出されている。

以上4回の緊急発掘調査がなされ、更に本報告書分を併せて5回の発掘調査が行なわれている。

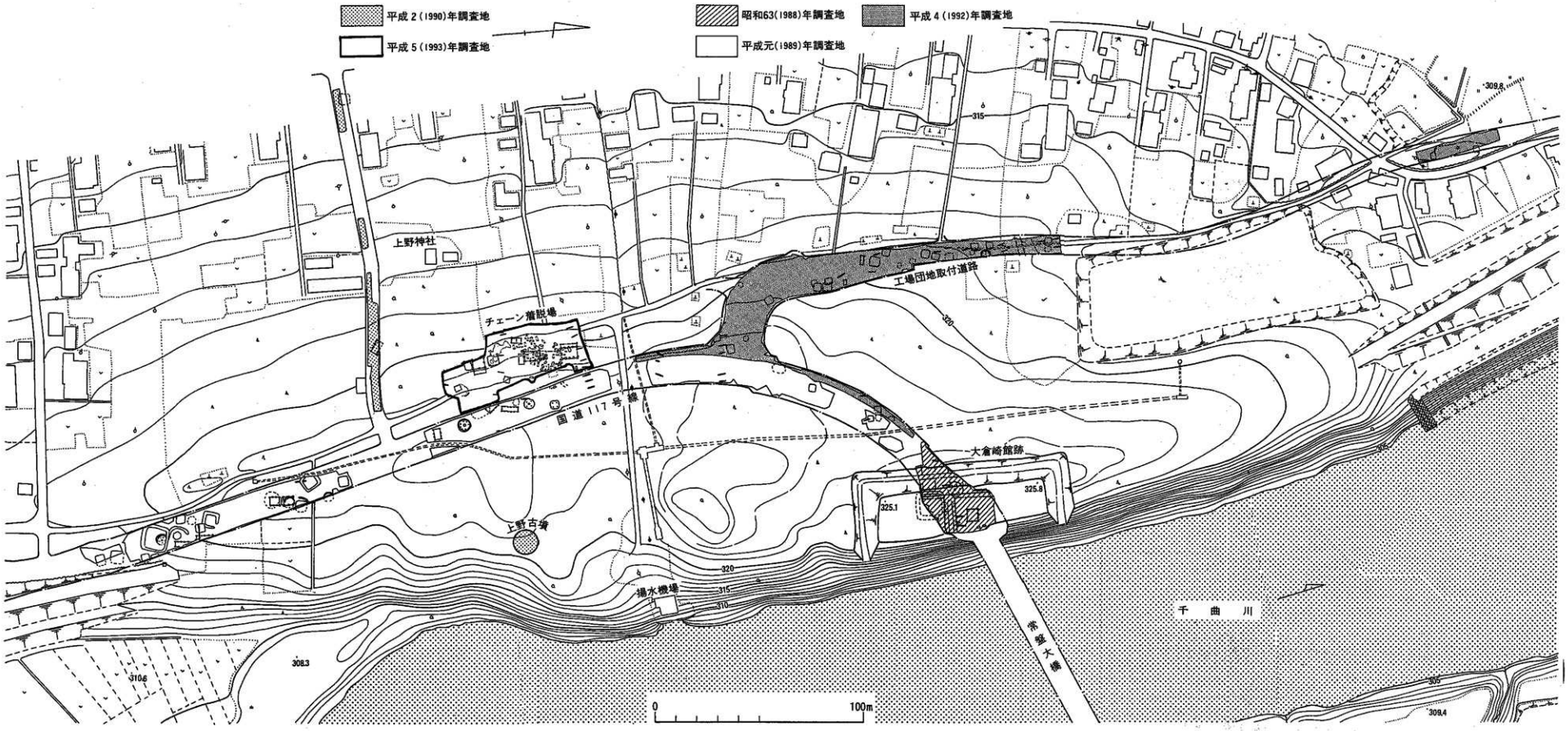


図4　調査地周辺の地形　1:1,500

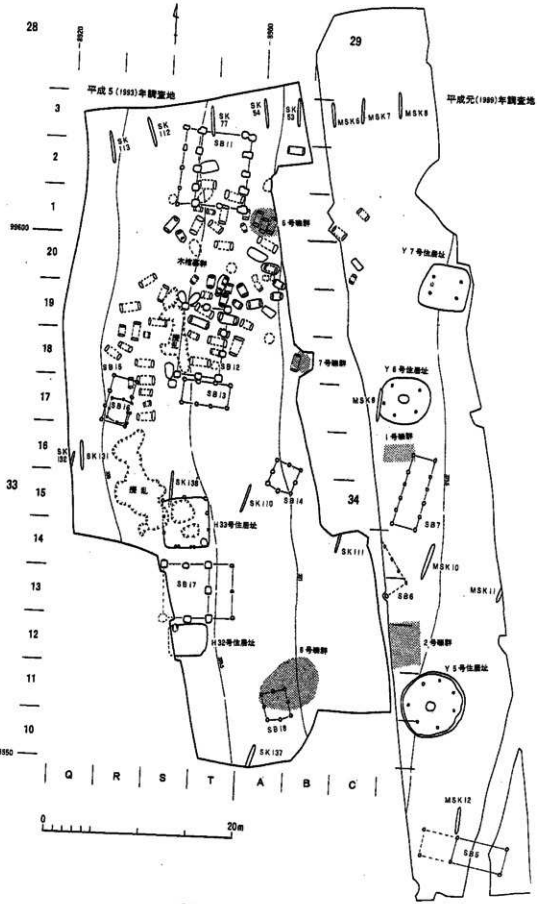


図5　調査地全体図　1:400

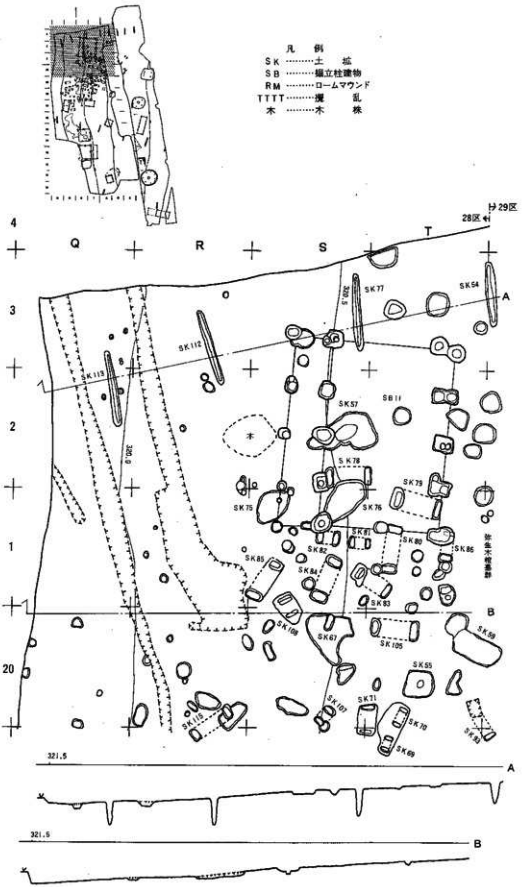


図6 遺構実測図1 1:160

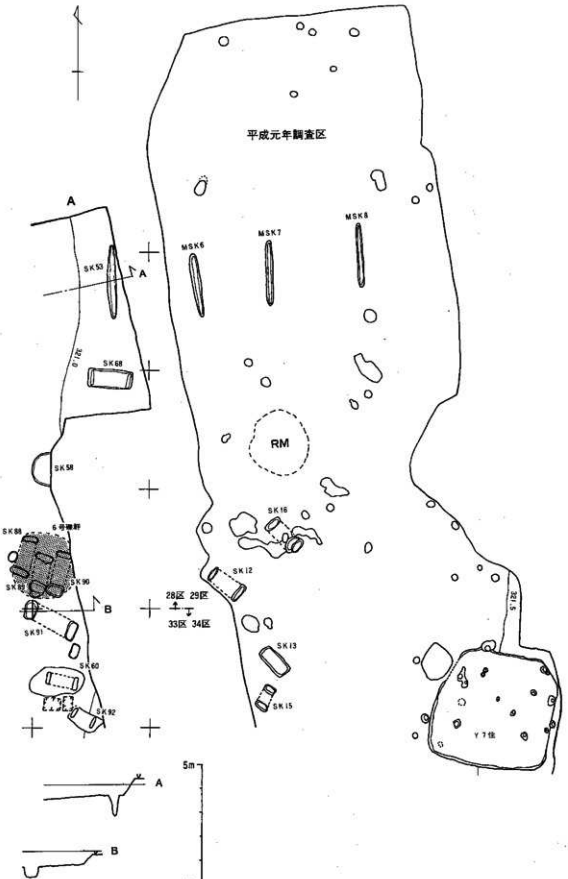


図7 遺構実測図 2 1:160

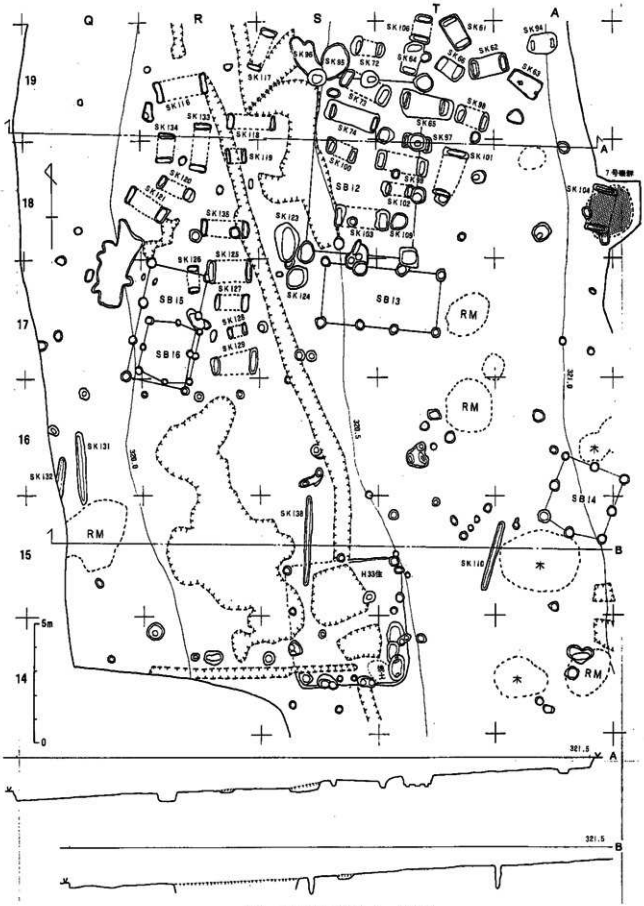


図8　遺構実測図 3　1:160

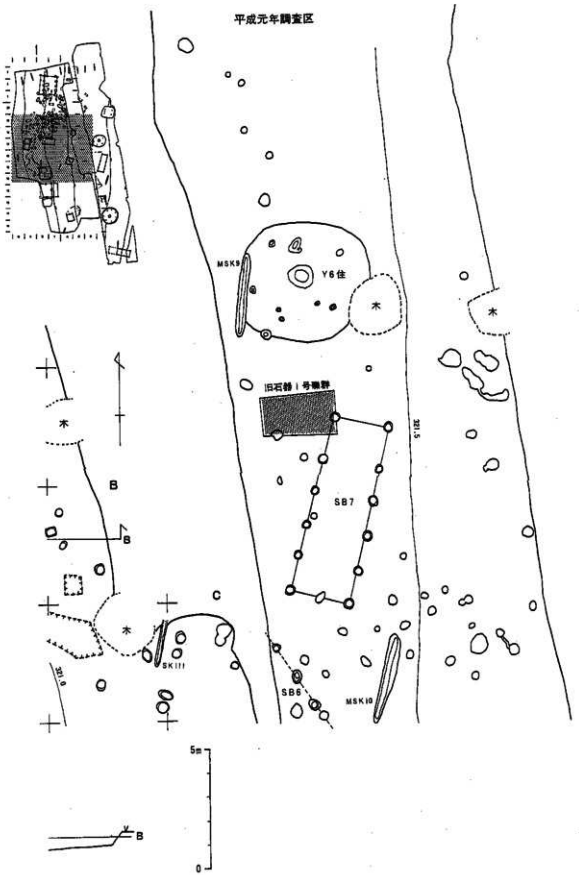


図9　遺構実測図4　1:160

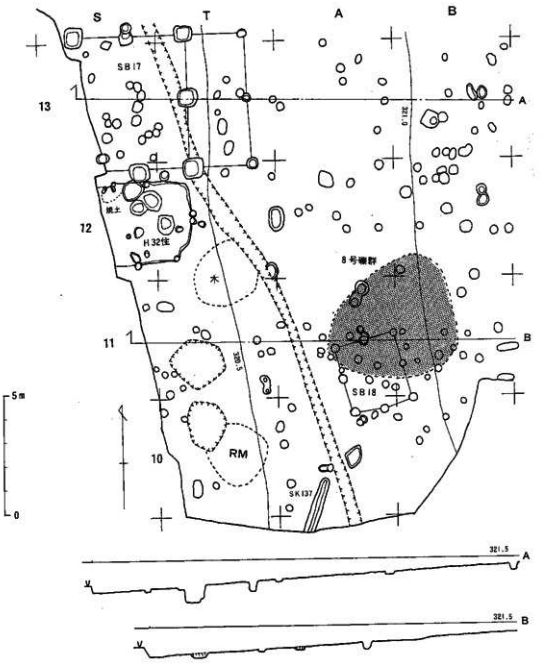


図10 遺構実測図5 1:160

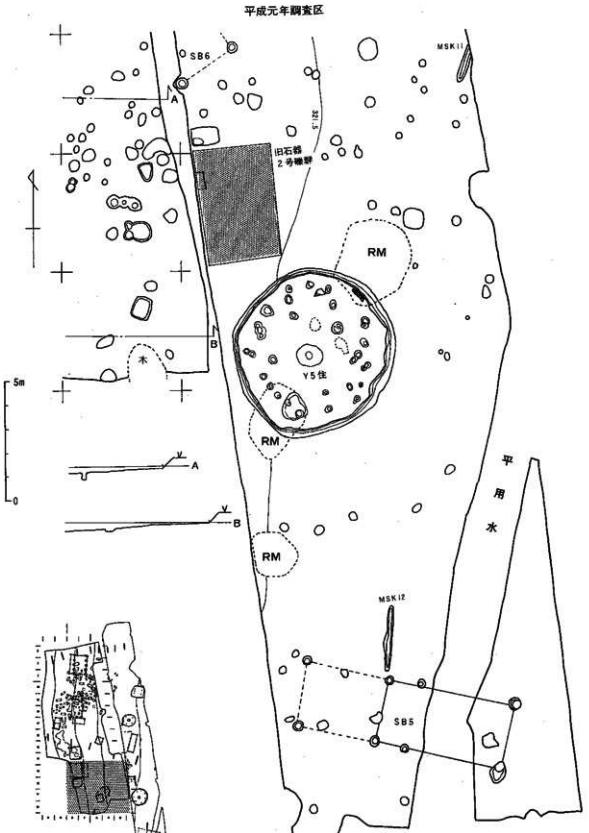


図11 遺構実測図 6 1:160

第3章　旧石器時代

1　層序と遺物の出土状態

A　層序と文化層

(1)　過去における土層調査

上野遺跡が立地する丘は上野・大倉崎丘陵と呼ばれ、比較的新しい年代に離水したと考えられている。平成元年の調査時に段丘形成年代について調査を実施し、その成果が明らかにされているので（早津・小島 1990）、それを引用しながら触れていくことにする。

上野・大倉崎丘陵の高位である舘跡地点での柱状図によれば(図12A)、下位から礫層（層厚2m以上)→砂とシルト～粘土の互層（約4.5m)、褐色風化テフラ層（20～30cm)→黒色腐食土層（数10cm）となっている。そして、褐色風化テフラ層内より約2.2万年前の鈴良Tn火山灰（AT）が混交した状態で産出する。また、旧石器第4地点での層序では(図12B)、褐色風化火山灰層の下位には乾裂とみられる不規則な割れ目がみられ、ＡＴ層は褐色風化テフラ層の下部やその下位の乾裂の割れめの間により多く含まれる傾向があり、褐色風化テフラ層の下限にＡＴの降下があったことを示している。

以上のような状況により、第4地点の離水時期は、水成堆積物であるシルト～粘土層の上に堆積される乾陸成の褐色風化テフラ層の下限の年代だということになり、上野・大倉崎丘陵が明確に陸化した時期がＡＴの降下直前、すなわち約2.2～2.5万年前ころと推定されるのである。

上野遺跡における旧石器時代の遺物は、第4地点の石器群に代表される。玉髄製の掻器が多量に出土し

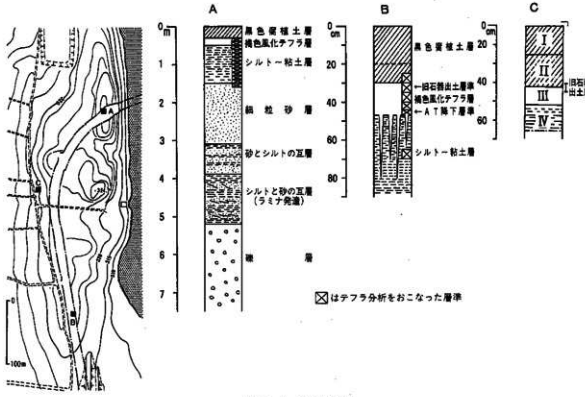


図12　土層柱状図

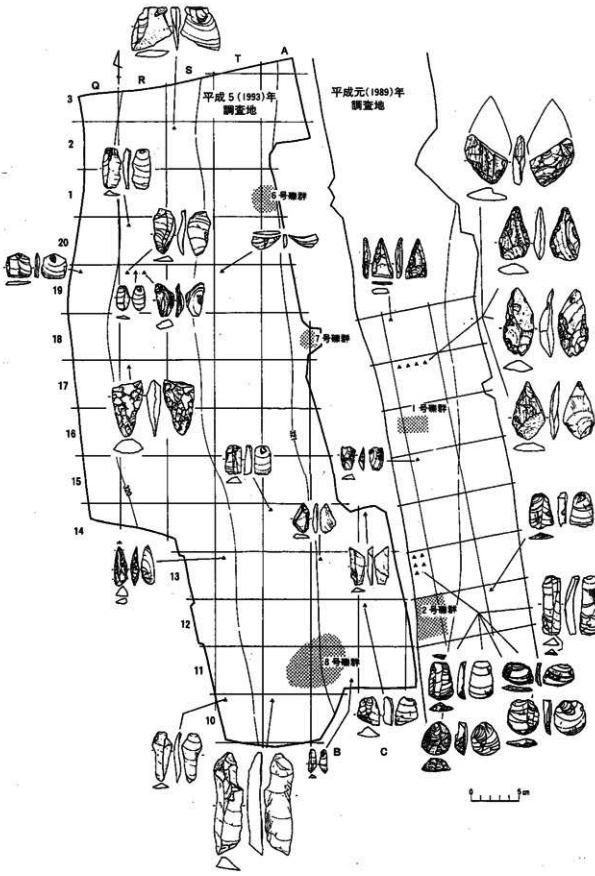


図13　遺物分布図　1：400

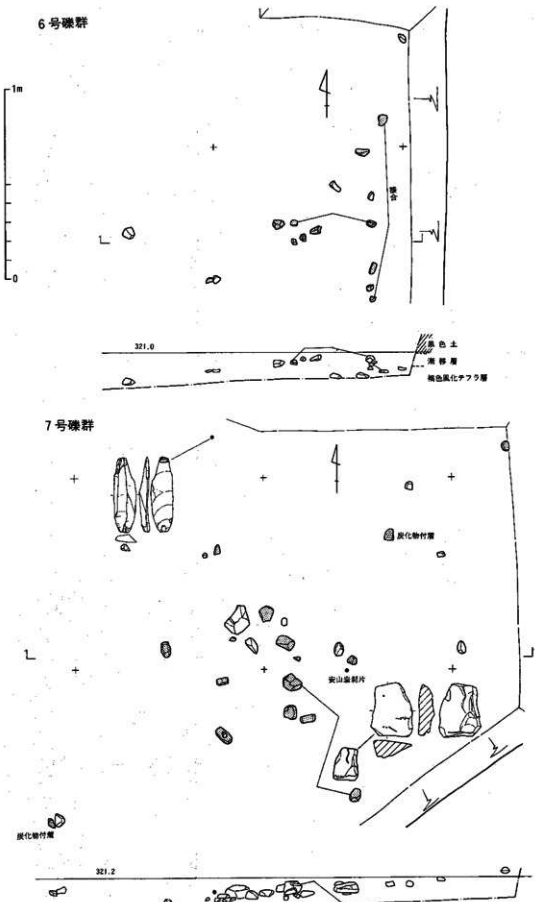


図14　6・7号礫群分布図　1:20

これに尖頭器が伴うもので、層位的には黒色土直下の漸移層～褐色風化テフラ層最上部で出土している。つまり、ＡＴ降下時期よりはるかに新しいことを示している。1989年度調査における旧石器時代石器群の出土層位はテフラ層最上部～漸移層であった。なお、1992年調査の文化層は漸移層内を想定したが、かなり破壊を受けていたので明確に指摘できない。

(2) 今回の調査区の層序

指標的な層序は、６号礫群の調査区端部において作成した（図14)。約30cmの黒色土があり、その下位に層厚約８cmのテフラ層と漸移層がある。また、褐色風化テフラ層の下部については調査できなかったが、基本的には1992年調査の図12Ｃと同様の層厚と考えられる。遺物は、褐色風化テフラ層上部から漸移層にかけて出土している．ただし、礫群はほぼ原位置を保って出土したと考えられるが、他地区石器群においては弥生・平安期の遺構によって撹乱された場所よりの出土であった。したがって、礫群・石器群すべてが同一文化層として認定することはできないが、６号礫群の層序を観察する限りにおいて、褐色風化テフラ層の最上部が文化層ととらえられそうである。

Ｂ　地点分布

1989・1992年の調査によって、旧石器時代の石器群や礫群を通し番号を付してきている。石器群を中心としたまとまりを第○地点、礫群のまとまりを○号礫群としている。今回の調査においてもそれを踏襲して付番している。

(1) ６号礫群（図13・14）

大地区割りの28・29区のＴ－１・Ａ－１に位置する。東側が調査対象区域外となるため全体であるか不明である。確認した範囲は100×160cmであるが、その中心は100×70cmの小範囲である。礫は拳大の焼礫(スクリントーンで示した礫）がまばらに散在しており、総数16点で構成される。礫の接合も２点認められる。出土層準は褐色風化テフラ層上部から漸移層にかけてであり、レベル差は約10cmある。

(2) ７号礫群（図13・14）

34Ａ・Ｂ－18に位置する。拳大もしくはそれよりやや大きな礫が、径100cmの範囲にまとまっている。焼礫が大部分を占めるが、赤化していないものもある。また、一部の焼礫には黒いタール状の炭化物付着が認められる。

遺物は、やや離れた地区より頁岩製の彫器が出土している。また、礫群を構成する中にストーンリタッチャー様の台石が出土している。

(3) ８号礫群（図15～18）

34Ａ・Ｂ－11・12に位置する。500×400cmと大きな範囲と推定されるが、ほぼ中央に道路敷設痕があって大きく破壊されている。現象的には東西にそれぞれまとまりを見せているので別の礫群の可能性もあるが、礫の接合例もあるので同一礫群とした。なお、説明するにあたって、便宜的にＢ－11区・Ａ－11区・Ｂ－12区とわけて行なうこととする。

Ａ－11区（図16）　拳大の礫が比較的多くまとまって出土している。密集するのは100cmの小範囲で、焼礫が多い。この部分には珪岩製のエンド・スクレイパーや黒曜石製の削器が出土している。またこの部分より少し離れて台石が出土している。

Ｂ－12区（図18）　Ａ－11・Ｂ－11区よりやや北に離れて約10点ほどがまとまる礫群があるが、160cmしか離れていないので本礫群に含めた。礫群内及びその周辺より黒曜石製の剥片が出土している。

Ｂ－11区（図17）　幼児拳大の小礫がまばらに散在しており、大半が赤化している。礫群に混じって台石・敲石・磨石などが出土している。また、珪岩製の彫器も磨石に近接して出土している。

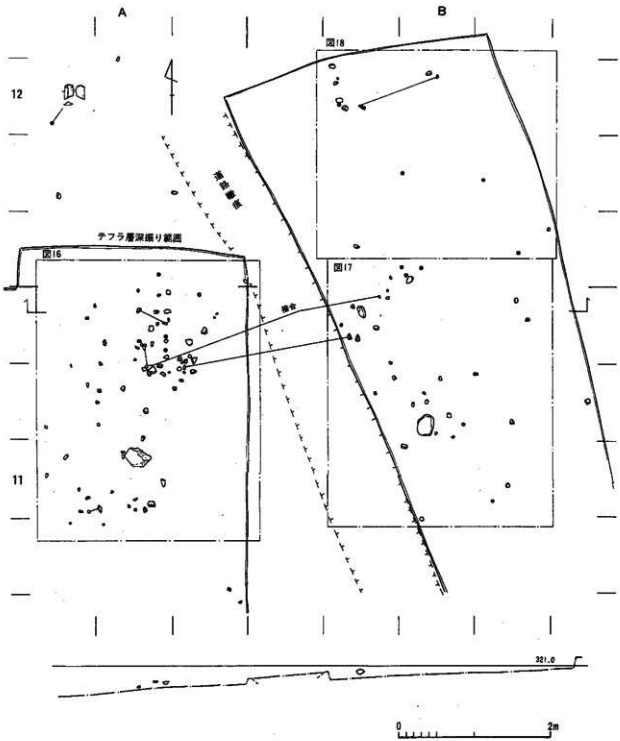


図15　8号礫群分布図　1：50

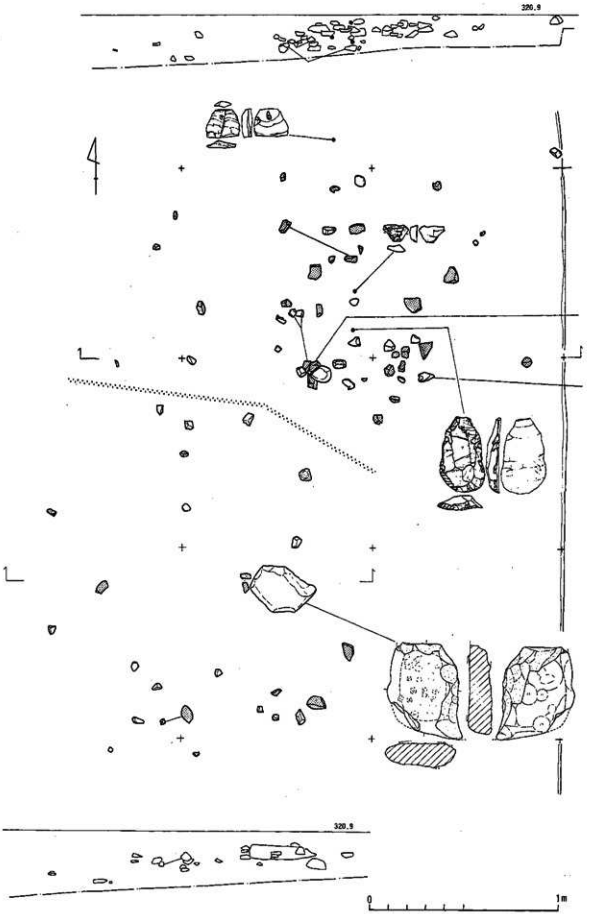


図16　8号礫群（A－11）　1：20

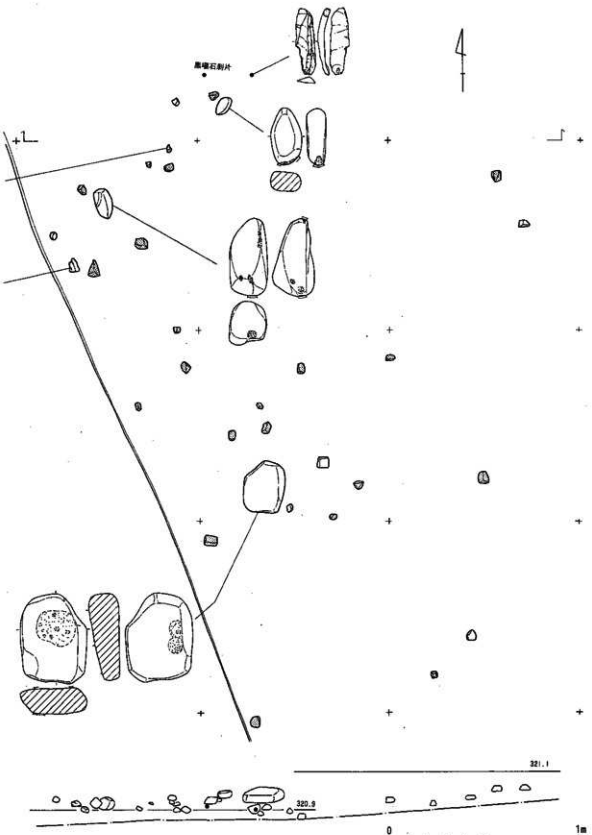


図17　8号礫群（B−11）　1：20

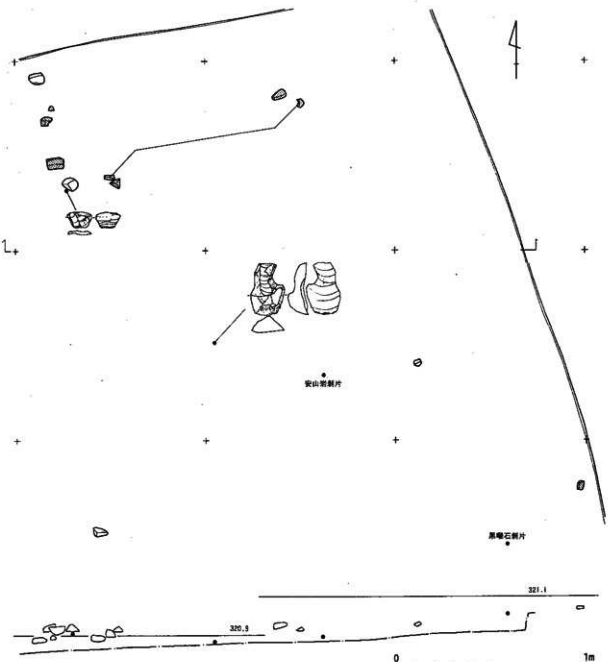


図18　8号礫群（B－12）1：20

2 出土遺物

今回の調査によって出土した旧石器時代の遺物は総数約30点である。弥生・平安時代等の遺構によって包含層が破壊されているため、2か所の礫群出土地点以外単独に近い状況で出土している。以下に、礫群出土遺物と地区単独出土に分けて説明を加える。

(1) 第7号礫群出土石器（図19－1・図21－27）

彫器（図19－1）

1は正面右先端部の右側縁にファシットが入る彫器である。反対の左側縁および裏面には調整加工が施されている。打面調整の施された整った刃器状剝片を素材としている。

ストーンリタッチャー（図21－27）

線状痕や磨り面が認められる台石である。ねずみの歯形様の傷も多く認められるためストーンリタッチャーとした。

(2) 8号礫群出土石器（図19・21）

彫器（図19－2）

やや湾曲した刃器状剝片を素材とし、左先端部から斜めにファシットを入れたもので、素材に対してほぼ90度の刃部を形成している。基部右側縁には微細な加工が施される。黒色の珪岩製である。

削器（図19－3）

破損しているので明確でないが、端部に荒い調整加工されている。黒曜石製で、加熱を受けたためかやや白く変質している。

刃器状剝片（図19－4）

黒曜石製で、基部側約半分を残す。正面は主要剝離面とは180度反対の方向からの剝離面をとどめており、両設打面による石核から作出されたものと考えられる。

掻器（図19－5）

珪岩製の幅広な縦長剝片を素材とした、全長7.9cmを測る中形から大形の掻器である。基部を除いてほぼ全面に調整加工が施されるが、刃部は先端部に急斜度による加工を施して円弧状に仕上げている。典型的なエンド・スクレイパーであるが、珪岩製は本遺跡および飯山地方でも初見である。

剝片・砕片（図19－6・7）

6は黒曜石製で、基部側を欠く。正面の端部に自然面を多く残している。

磨石・敲石（図21－25・26）

26は拳大の礫の表裏両面を平坦に磨っており、また、一方の端部が敲石としても使用されたものと思われ、あばた状になっている。25は、手のひらでようやく握れるくらいの大きさであるが、両端部に潰れ痕が認められる。凝灰岩系統の石で、礫群中の礫石質とは相違している。

台石（図21－29・30）

29は長方体に近い形態で、正面側に広い凹凸面が認められる。あばた状を呈しており、自然面とは明確に相違する。なお、裏面にもわずかに認められる。30は凹凸の認められる平石で、正面側には29例のように明確ではないがあばた状の打痕が認められる。

(3) 各地区出土石器

ナイフ形石器（図21－8～10）

3点出土している。8は幅広で不定形な剝片を素材とし、斜めに切断して尖頭状のナイフ形石器としている。基部側には打面をわずかに残す。9は折損したナイフ形石器を再加工したものである。正面左側縁

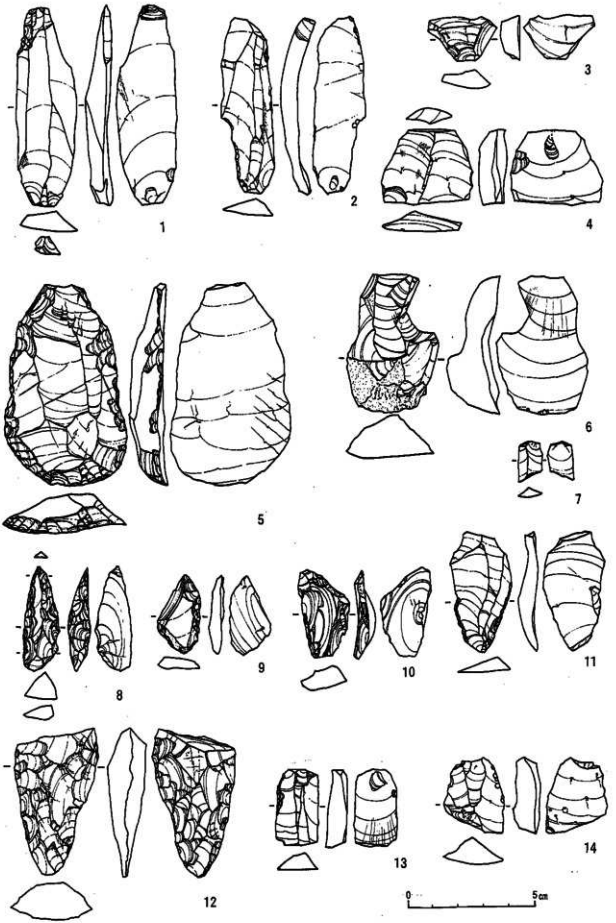


図19 旧石器時代の遺物1　2:3

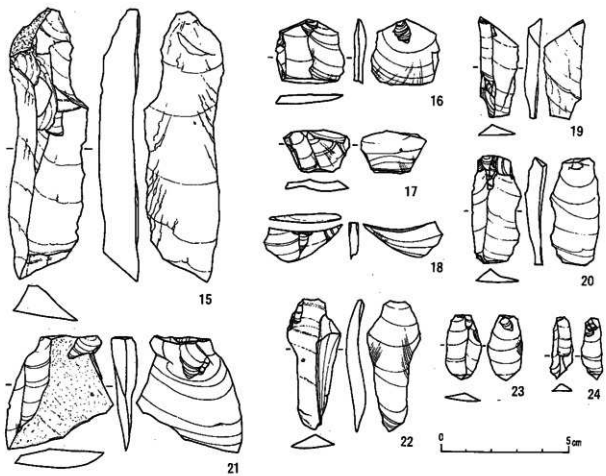


図20　旧石器時代の遺物2　2：3

先端部の破損部分の両端に再加工を施している。10は、横長剥片を素材としている。雑なブランディングで、ナイフ形石器としてはやや違和感がある。

削器（図19－11）

縦長剥片の黒曜石を素材とし、微細な加工により刃部を尖頭状に仕上げている。加熱により白く変色している。

尖頭器（図19－12）

中ほどより先端部を欠損するが、半月状を呈する尖頭器と考えられる。正面側にはやや急斜な加工を施し、裏面側は平坦な加工を施している。そのため横断面はかまぼこに近い形態を取る。

刃器（図19－13・14）

加工は認められないが、微細な小剥離痕が明確に認められる刃器状剥片を刃器として報告する。13は下端部を欠く。基部側左側縁に微細な小剥離痕が認められる。14も右側縁に多くの微細な小剥離痕が認められる。いずれも使用痕と推定される。ともに黒曜石製である。

剥片（図20－15～24）

15は安山岩製の縦長剥片である。基部側の正面一部に表皮を残す。16～18は黒曜石製の剥片で、それぞれ欠損している。19・20は赤褐色の珪岩で、類似しているが同一母岩ではない。21は不定型な黒曜石の剥片である。表皮を多く残している。22～24も黒曜石製で、剥片及び砕片である。

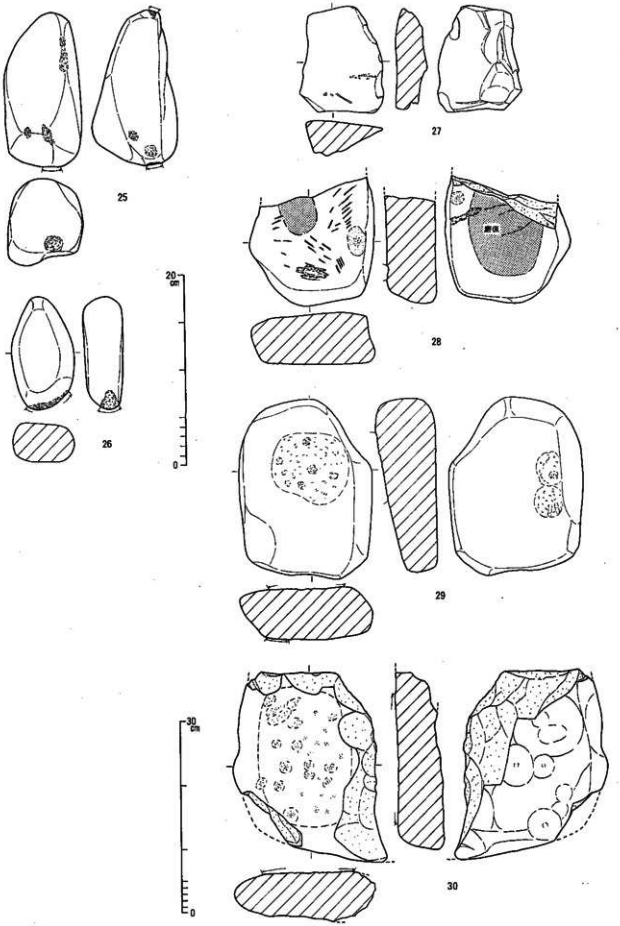


図21 旧石器時代の遺物3 1:4 1:6

表1　旧石器計測表（礫製品は除外）

No.	器種名	計測				破損	石質	備考
		長さ mm	幅 mm	厚 mm	重量 g	○		（石器個体番号）
1	彫器	79	24	11	16.5		頁岩	UN34B18 礫群4
2	彫器	70	21	14	13.1		珪岩	UN34B12 礫群17
3	削器	14	27	5	3.3	○	黒曜石	UN34A11 礫群5
4	刃器	30	35	12	11.6	○	黒曜石	UN34A11 礫群31
5	掻器	79	48	14	60.9		珪岩	UN34A11 礫群31
6	剝片	55	36	31	25.2		黒曜石	UN34B12 礫群10
7	屑片	12	10	5	0.6	○	黒曜石	UN34A12 礫群3
8	ナイフ形石器	41	15	10	5.1		黒曜石	UN33T13
9	ナイフ形石器	31	17	5	2.6		黒曜石	UN34B13
10	ナイフ形石器	35	20	8	5.1		黒曜石	UN33R19
11	削器	48	25	7	5.6	○	黒曜石	UN33R19 受熱　白色化
12	尖頭器	59	34	15	22.2	○	頁岩	UN33R17
13	削器	30	17	7	4.2	○	黒曜石	UN34A14
14	刃器	30	24	11	6.4		黒曜石	UN34C12P2
15	剝片	109	32	14	42.1		安山岩	UN34A10
16	剝片	26	22	4	4.0		黒曜石	UN33G19
17	剝片	17	27	5	2.5		黒曜石	UN34B12 礫群5
18	剝片	14	31	4	1.4		黒曜石	UN33T19
19	剝片	40	16	6	3.3		珪岩	UN34C14
20	剝片	43	19	7	4.6		珪岩	UN33R20
21	剝片	46	43	10	13.0		黒曜石	UN28S2
22	剝片	52	22	6	4.3		黒曜石	UN34T10-1
23	剝片	26	14	3	1.0		黒曜石	UN33R19
24	剝片	25	10	3	0.5		黒曜石	UN34A12

第4章　弥生時代

1　遺　構

弥生時代の遺構には木棺墓・土坑墓・掘立柱建物址・土器集中地点がある。木棺墓・土坑墓は調査地北半部に集中してあり、掘立柱建物址は南半部に散在的にある。

土器集中地点は明確な遺構として検出できなかったが、黒色土中で遺物が集中していた所を土坑として付番し報告する。

これらの遺構はいずれも弥生時代中期後半に属する

A　木棺墓・土坑墓

墓と推定される長方形土坑のうち木棺木口痕跡をもつものを木棺墓、もたないものを土坑墓とした。ただし木口痕跡がなくとも木棺墓の可能性があり、この分類は便宜的である。

(1)　分布状況（図22）

木棺墓・土坑墓は29Ｂ－２区から33Ｒ－17区にかけて集中し、墓群を形成している。墓群は北東―南西が約35ｍ、北西―南東が約20ｍの楕円形を呈し、面積は約 600㎡である。

墓群は南端で一部掘立柱建物と接しているものの、基本的には竪穴住居址等の住居域とは重複していない。

墓址は平成元年度調査で検出されたものをあわせ、木棺墓60基、土坑墓５基があるが、未調査地や攪乱を考慮すれば100基に近い数からなる墓群と推定される。

墓群では木棺墓・土坑墓ともに切り合うことなく、計画的に配置されたかのような状態で検出されている。木棺墓は主軸を

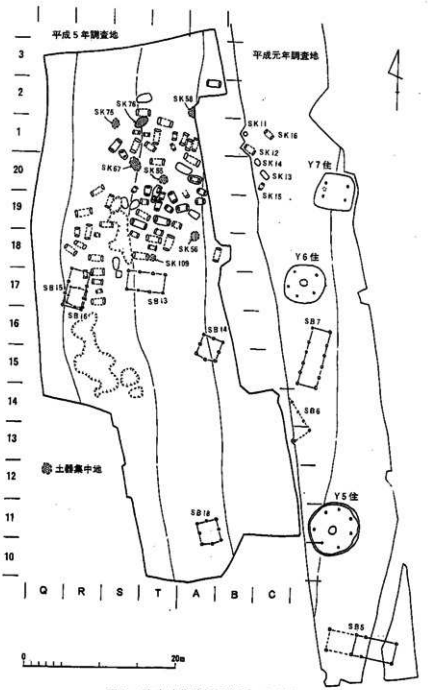


図22　弥生時代遺構分布図　1:500

原則として丘陵傾斜に直交ないし平行して整然と並んでいる。ＳＫ73・74・100・65・97・99・102や、ＳＫ135・125・126・127・128・129などはその好例である。これらのことから当墓群は同一集団による計画的な墓域と理解されよう。上野遺跡では中期から後期にかけて住居址や遺物が丘陵全域で検出されているが、墓群は今のところ当墓群が唯一である。他にも中期の墓群があるのかどうか、後期の墓群の位置などについては今後の課題である。

当墓群の中の分布をより細かくみると、木棺墓・土坑墓のあり方に粗密があり、墓のない空間があることがわかる。墓のない空間は33Ｓ・Ｔ－20区、28Ｔ－２・29－２区、34Ａ－18区である。33Ｓ－17・18区も攪乱があるものの墓のない空間の可能性がある。これらのことを考慮すれば墓群の中をさらに細分することができる。詳細な検討は将来の課題だが、平成元年調査時に検出されたＳＫ12を中心とする一群、ＳＫ68を中心とする一群、28Ｓ・Ｔ－１区を中心とする一群、29Ａ－１・34Ａ－20区を中心とする一群、ＳＫ104 を中心とする一群、33Ｓ・Ｔ－18・19を中心とする一群、33Ｒ－17～19区を中心とする一群の７群に分けられようか。

そしてこの７群間には規模・構造・副葬品などの点で隔差はない。これは当墓群を形成した集団内がより小単位の集団に分けられ、その単位集団は比較的等質であったことが推定される。

(2) 木棺墓・土坑墓の規模と構造（表２・図23）

規模 木棺墓・土坑墓の規模を示したのが表２である。このうち木棺墓の長さ・幅については木口痕跡のみの検出例が多いので、長さは木口が置かれたと推定される木口痕跡最深部の心々距離とし、幅は垂直に近く掘り込まれた部分の上端幅とした。

木棺墓の規模は、長さ50cmの小さいものから205cmのものまである。人間一人を伸長位で葬る大きさと考えられよう。そして、大きいものは大人用、小さいものは子供用と考えられる。しかし規模の分布をみれば、大型と小型が明確に分かれない（図23）。

土坑墓の規模は、長さ130cmから210cmで木棺墓と同じく人間一人分の大きさである。

構造（図24～27） 木棺墓は、残りの良い例でみると、墓坑と木口痕跡がある。墓坑は木口痕を囲んで長楕円形に掘り込まれている。掘り込みは浅く、土層観察のできたＳＫ71でも20cmであり、多くは遺構検出面である漸移層上面から10cm程であり、墓坑が検出されなかったものが最も多い。これは塩崎遺跡群検出例(注)などが浅くとも30cm以上あることと比較すると当遺跡例は浅い。木棺を据えた後に土まんじゅう様に盛土をした可能性が高い。

木口痕跡は長方形プランで、深さは10～50cmをはかり、平均約30cmである。木口板は土層観察や穴の形状から厚さ約10cmと推定される（SK104・71・65・97・122等参照）。また土層観察や穴の形状から、木口板は木口板を置く穴の内端側に置く例（ＳＫ91・60・61・65・97など）と、外端側に置く例（ＳＫ84・74・103など）と、一方は内端に一方は外端に置く例（SK104・121など）がある。

木棺の板の組み合わせは側板の痕跡を検出していないが、

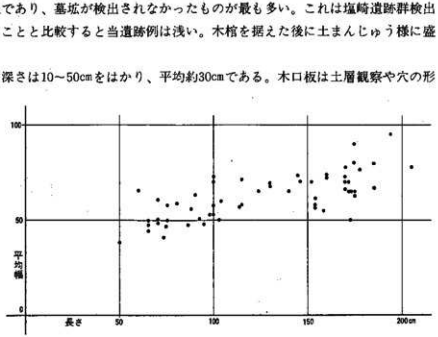


図23 木棺墓規模分布図

墓坑との関係から考えれば、ＳＫ68例では墓坑両端に木口痕があり、ＳＫ71やＳＫ65の例でも墓坑端のすぐ内側に木口痕のある例が多いので、いわゆる「H形」に組み合っていたとしても側板の木口板からの突出は少ないと考えられる。

また同一墓において木口痕跡の幅に10cm以上の差があるもの（ＳＫ79・92・74・99）をみるといずれも丘陵高位側の木口痕の幅が広い。頭位を意識したのであろうか。

(3) 副葬品・供献品（図28・29）

土坑墓ではＳＫ57・63・123に土器の供献が認められた（図29）。ＳＫ57は小型の壺の胴部以下と、小型の坏の２点が中央から出土した。ＳＫ63は完形品が押しつぶされた状態で坑底中央から、坑底東端から壺の底部片が出土している。ＳＫ123は坑底北端から略完形に復元できる壺の破片が1個体分と壺の口頸部片が出土している。

木棺墓は土器の供献と思われる出土状態はなく、小片が木口痕跡などから出土している。

管玉は大型品がＳＫ125（図28）一か所のみから出土している。出土位置から首飾りと推定される。ただし管玉などのごく小さい遺物は、慎重に掘り下げているものの見のがしている可能性が充分にあり、また坑底が削平されている例も多く、副葬が１か所のみであったとはいえない。

(4) 土器集中地点

黒色土中で土器が集中して出土し、不明瞭ながらも土層変化が認められた所を、土坑番号を付してとり上げた。これらの土器集中地点は木棺墓・土坑墓群の周辺にある。

ＳＫ58 29Ａ－２区にある。調査地東壁に接し西半分を検出。1.5ｍ×0.8ｍの範囲の黒色土中に土器片が集中していた。完形に復元できた土器はないが、図示し得た土器は多い。

ＳＫ76 28Ｓ－１区にある。2.0ｍ×1.2ｍの楕円形で、土器小片が多く出土している。

ＳＫ75 28Ｓ－１区にある。1.3ｍ×1.2ｍの範囲に土器片が集中していた。完形の小型鉢が出土している。

ＳＫ67 28Ｓ－20区にある。2ｍ×1.8ｍの不整な形の範囲に土器片が集中していた。ほぼ完形に復元された壺が出土している。

ＳＫ55 28Ｔ－20区にある。1.5ｍ×1.5ｍの隅丸方形の範囲に土器片が集中していた。完形に復元できた土器はない。

ＳＫ56 34Ａ－18区にある。直径1.2ｍの円形の範囲に土器が集中していた。出土層位は黒色土が厚い地点ということもあって黄色粘質土層（地山）より約20cm上であった。

注　長野市教育委員会『塩崎遺跡群Ⅳ』1986・3

B　掘立柱建物址（図30）

掘立柱建物址は、ＳＢ11・12・13・14・15・16・17・18の８軒検出された。このうちＳＢ11・12・17は、確認土層が上層部であることと、建物の形状・柱穴の大きさ、周囲で検出された遺物などから、平安時代に位置づけた。他については、柱穴の確認面が前３軒より深いこと、検出された遺物・遺構の状態などから、弥生時代に位置づけをした。ここでは弥生時代に位置付けられる掘立柱建物として、その形状・大きさから、二つのタイプに分け、５軒を報告する。

第一は、１間×３間の長方形状を呈する13号と15号のタイプである。大きさもほぼ同大である。

第二のタイプは、２間×２間の正方形状を呈する、14・16・18号のタイプである。この３軒の形状も酷似している。18号はやや小型である。

(1) 13号掘立柱建物址（ＳＢ13）

33Ｓ・Ｔ－17区において検出される。梁行１間×桁行３間・250cm×500cmを計り、柱間寸法は、梁行が

250cm、桁行は165～170cmである。柱穴の深さ（以下深さという）は確認面より20～30cmで深くない。方向は東西に長い。

(2) 15号掘立柱建物址（ＳＢ15）

33Ｒ－17区を中心に位置する。大きさ・形状は13号と同じである。１間×３間・250cm×495cmで、柱間寸法は、桁行250cm、梁行は165～170cmである。深さは30～48cmを計る。方向は南北に長く、約15度東に傾いて13号とほぼ90度ずれている。

(3) 14号掘立柱建物址（ＳＢ14）

34Ａ－15・16区にまたがって位置する２間×２間の小型建物であり、梁行260cm、桁行270cmとほぼ四角形を呈している。深さは35～60cmを計る。四辺に間柱があり、南側に位置する間柱１本のみが、両隅を結ぶ線より約20cm外側に突出している。これは、両隅柱にかかる桁の外側に、棟までの通し柱を建てたものと推測できる。梁の太さだけ間柱の柱穴が外側に突出している訳である。従って、棟方向は南北と言うことになる。建物方向は東に12度傾く。

(4) 18号掘立柱建物址（ＳＢ18）

34Ａ・Ｂ－10・11区において検出された小型建物である。２間×２間で、梁行260cm、桁行280cm、深さ25cm～40cmを計る。四辺に間柱があり、南側の１本が外側に約20cm突出する。この形状は14号と全く類似するものである。棟方向は南北方向で、建物方向は、約15度西に傾く。

(5) 16号掘立柱建物址（ＳＢ16）

33Ｒ－17区において15号（ＳＢ15）と重なった形で検出された小型建物である。２間×２間で、桁行225cm、梁行225cmと四角形を呈し、深さ30～50cmを計る。四辺にある間柱のうち、南北の２本が20cmほど外側に突出する。棟方向は南北であり建物方向は約10度東に傾いている。15号と16号の柱穴の切り合い状態の確認は、難しく確かでない。

表２　木棺墓・土坑墓一覧表

木棺墓

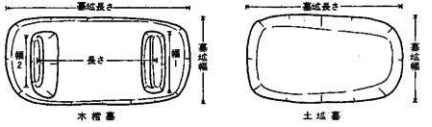
番号	長さ	幅１	幅２	墓坑（長さ×幅）	方　位	備　　考
78	170	70	62	—	Ｅ１° Ｓ	
79	172	80	60	—	Ｅ10° Ｓ	
81	73	46	36	—	Ｅ４° Ｓ	
82	72	62	60	—	Ｅ２° Ｓ	
80	90	67	60	—	Ｎ６° Ｅ	
86	77	56	—	—	Ｎ６° Ｅ	
87	173	50	50	—	Ｎ24° Ｗ	
84	124	65	64	—	Ｎ23° Ｅ	
83	154	62	54	—	Ｅ30° Ｓ	
85	154	62	60	125×94	Ｎ27° Ｅ	
108	56	66	45	122×112	Ｎ32° Ｗ	
105	170	80	76	—	Ｅ３° Ｓ	
68	146	72	68	184×70	Ｅ３° Ｓ	
88	140	67	64	—	Ｎ19° Ｅ	
89	130	70	66	—	Ｎ13° Ｅ	
90	175	65	65	—	Ｎ12° Ｅ	
91	172	65	64	—	Ｅ21° Ｓ	
60	104	68	52	176×100	Ｅ10° Ｓ	
93	—	50	—	—	Ｎ33° Ｗ	
62	130	66	72	168×76	Ｅ13° Ｎ	
92	88	61	50	127×75	Ｅ26° Ｓ	
94	86	50	45	120×82	Ｅ８° Ｎ	

104	170	72	70	—	N13° E	
71	98	55	52	140×84	N 3° E	
70	50	39	37	95×55	N23° E	
69	70	50	50	140×112	N23° E	
107	70	52	46	—	N37° W	
72	92	55	48	—	E 6° S	
106	80	62	56	—	N10° E	
66	75	60	54	115×68	N44° W	
61	100	76	70	150×94	N27° W	
64	100	56	50	145×80	N15° E	
98	100	60	54	—	E15° S	
65	152	70	68	226×110	E10° S	
73	160	72	72	260×110	E25° S	
74	185	74	60	250×104	E16° S	
100	103	52	49	—	E21° S	
97	75	56	44	—	E11° S	
99	178	85	70	—	E10° S	
101	185	85	76	—	N16° E	
102	65	50	46	—	E 5° S	
103	205	80	76	250×110	E 5° S	
115	175	65	60	—	N54° E	
117	154	62	56	—	N22° E	
116	194	96	94	—	E10° N	
118	173	66	63	—	E 3° S	
119	60	70	62	—	E 2° S	
120	115	60	53	—	E28° S	
121	160	80	67	—	E34° S	
133	170	75	70	—	N 9° E	
134	100	72	70	—	N 5° E	
125	158	62	50	—	E 2° S	管玉出土
127	114	62	52	—	E 3° S	
129	175	100	80	—	E 4° N	
135	175	80	80	—	E 4° S	
126	95	50	45	—	N 2° W	
128	65	40	42	—	N 9° W	
12	146	80	67	—	E38° S	平成元年検出
16	130	76	72	—	E45° S	〃
15	74	52	46	—	N26° E	〃

土坑墓

59	—	—	—	210×104	E25° S	
57	—	—	—	236×116	E21° N	壺・鉢完形品出土
63	—	—	—	146×78	E35° S	壺完形品出土
123	—	—	—	170×90	N 3° E	壺完形品、炭出土
13	—	—	—	137×62	N38° W	平成元年検出

土坑規模の測定位置



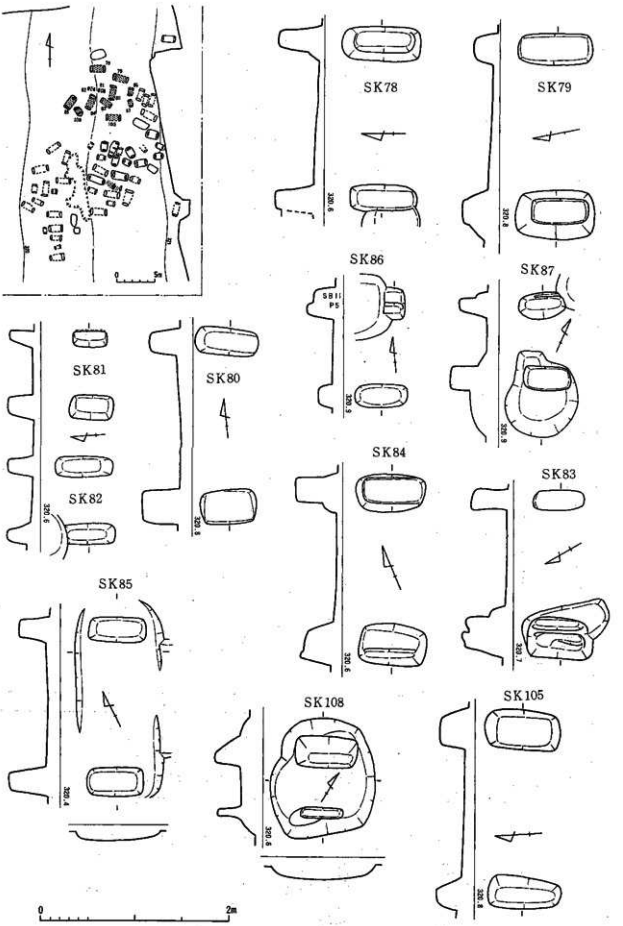


図24　木棺墓実測図 1　1:40

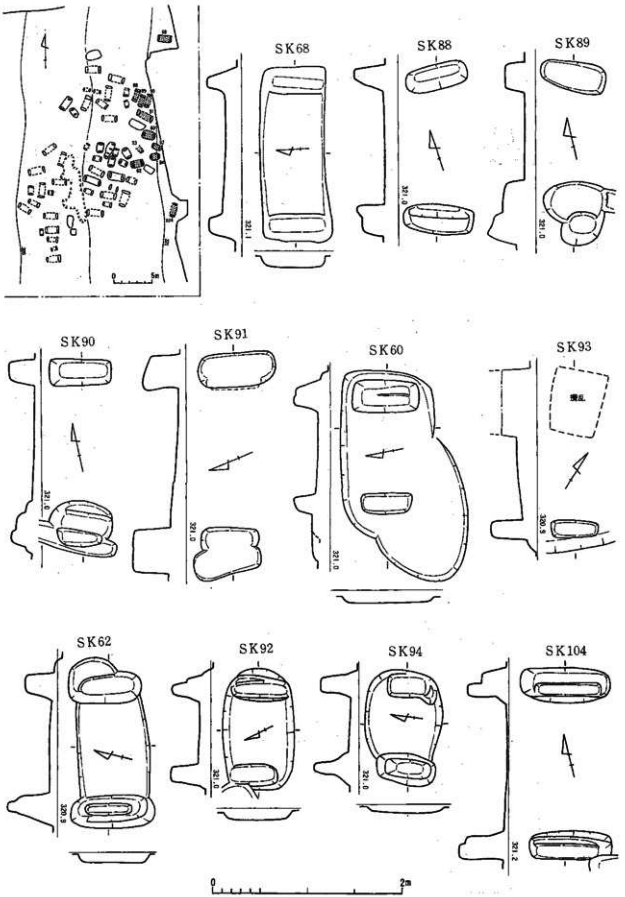


図25　木棺墓実測図２　1:40

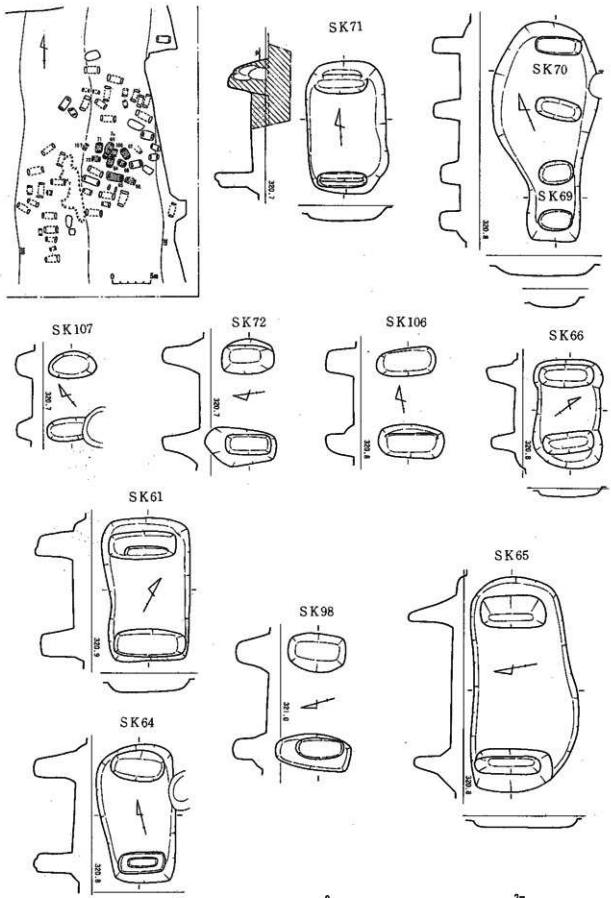


図26 木棺墓実測図3 1:40

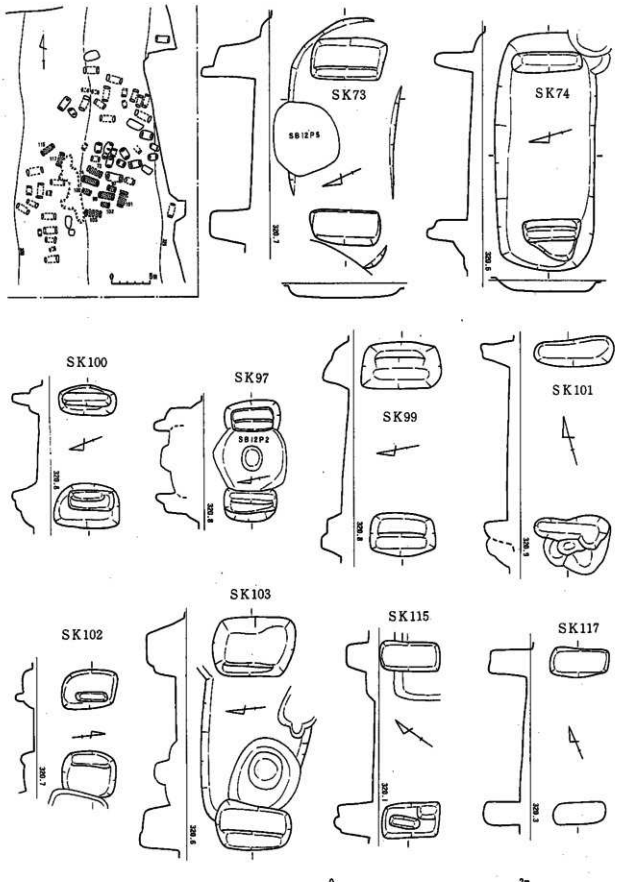


図27 木棺墓実測図 4 1:40

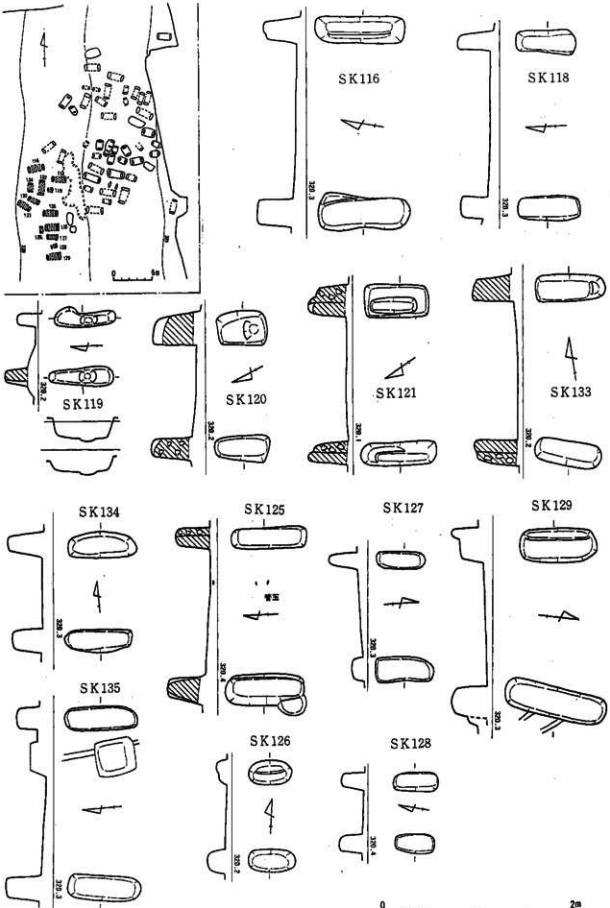
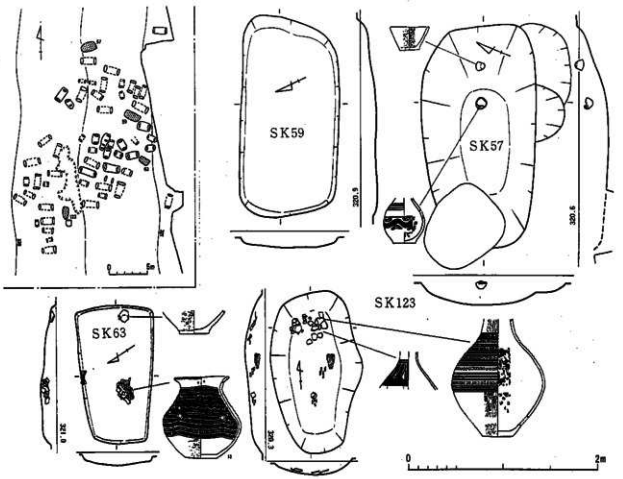


図28 木棺墓実測図5 1:40



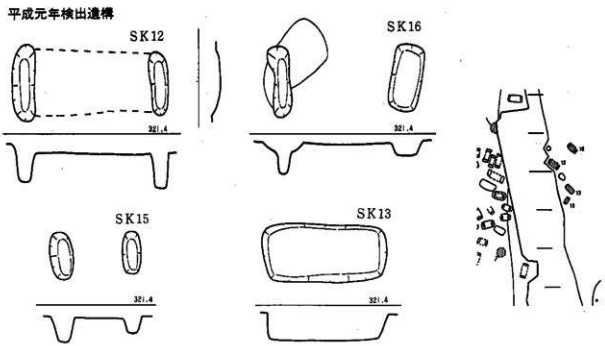


図29 土坑墓実測図 1:40

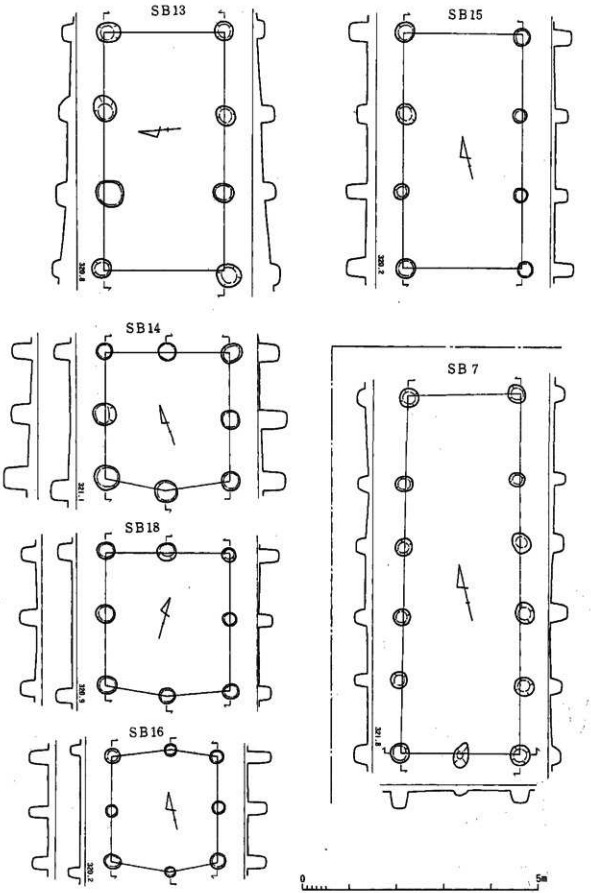


図30 掘立柱建物址 1:80

2 遺　物

A 土　器（図31～34）

(1) SK55出土土器

壺・甕などがあるが完形に復元でいるものはない。

1は壺の頸部～胴部である。縄文を地文とし、太いヘラ描沈線による3本単位の平行線文と、1周10単位の重弧文が施文される。器壁外面はハケのちヘラミガキ、内面は頸部をナデ、胴中位まで細かいハケ、下位を粗いハケで調整する。胎土は細かい砂粒を含み、外面は灰褐色～黒色、内面は暗褐色～黒色を呈する。

2は壺の胴部である。縄文を地文とし、櫛描による直線文と重弧文が太いヘラ描沈線により区画される。胴上位残存3分の1周に直径0.5cmの孔を1か所確認する。器壁の調整は外面がヘラミガキ、内面は磨滅により不明。細かい砂粒を胎土に多く含み、淡黄褐色を呈する。

3・4は甕の口縁部～頸部である。口唇部に縄文がめぐり、頸部に櫛描羽状文が施される。内面はハケ。共に細かい砂粒を含み3は灰褐色、4の外面は黒色、内面は灰褐色を呈する。口径は3が15.5cm、4が12.1cm。

66は甕の胴部片である。簾状文が縦位櫛描直線文に画せられ、刺突文がなされる。胎土は砂を含み、内面はハケ、黒色を呈する。

(2) SK57出土土器

5は口縁部を欠く小型の壺である。胴上位にヘラ描沈線による4本の平行線文、中位にヘラ描重波状文とさらにそこから派生したと思われる鳥状の文様に刺突文を充塡するものが見られる。調整は磨滅はげしく定かではないが内面にハケ痕が確認される。細かい砂粒を含む胎土で色調はやや灰色がかった赤褐色。底部径5.6cm。

6は完形の坏である。外面をハケからヘラミガキ、内面をヘラミガキで調整する。細かい砂粒を含み色は灰黄褐色。口径9.5cm、底部径4.7cm。

59は壺の胴部片である。ヘラ描波状文が縄文を区画する。内外面ともにハケ調整で、砂粒を含む胎土、赤褐色を呈する。

(3) SK58出土土器

壺・甕・甑・鉢が出土している。

7・8は壺の胴部～底部である。7はヘラ描直線文が3本平行にめぐり、内外面ともにハケ調整だが内面の方が細かいハケ目である。8は櫛描地文にヘラ描直線文と「水鳥足」文が施され、その下方1か所のみに限り山形刺突文とヘラ描文が施される。外面はていねいなヘラミガキ、内面は細かいハケで7・8ともに細かい砂粒を含み、灰褐色を呈する。底部径は7が7.5cm、8は6.8cm。

9・10は甕の上半部である。ともに口唇部に縄文がめぐり、9は胴上位に4本単位の櫛描文を縦位横位交互に施し、10は縄文を施文し、それぞれ刺突文にて区画する。9は外面をハケ、内面をヘラミガキ、10は内面をていねいなナデで整える。9は胎土に細かい砂粒を含み素地は淡茶色だが表面は黒色。10は雲母を多く含む胎土で色調は淡褐色。9の口径は17.0cm、10は11.0cm。

11は甑の底部である。直径1.6cm×1.2cmの楕円形の底部孔は焼成後に穿孔されたもの。内面はハケ。外面の色調は淡褐色で内面は暗褐色。底部径5.3cm。

12は完形に復元できる鉢である。口唇部を縄文がめぐり頸部～胴上位にかけ縄文の地文上に太いヘラ描

沈線による直線文・重波状文・刺突文が配される。内外面と底面はていねいにヘラミガキされる。胎土は細かい砂粒を含み淡黄灰色を呈する。胴下半に黒斑あり。口径13.6cm、高さ9.4cm、底部径5.0cm。

(4) SK63出土土器

13は完形に復元できる壺である。太い頸部から短く外反して終わる口縁部形態をもつ。口唇部を縄文がめぐり、頸部～胴下半にかけ縄文の地文上に刻み文を有する隆帯・ヘラ描波状文・ゆるやかな連弧文・1周5単位の島状文・刺突文がヘラ描直線にて区画される。頸部の相対する2か所には2孔一対の孔を有する。外面をヘラミガキ、内面をハケで整える。胎土は細かい砂粒を多く含み、淡黄褐色を呈する。胴下半に黒斑あり。ややいびつであり口径は12.5cm～13.7cm、高さは約19.8cm、底部径7.5cm。

14は壺の胴下半～底部である。外面はヘラミガキされるが内面は剥離しており定かでない。胎土は砂粒を含み白灰褐色を呈する。底部はヘラケズリの調整で直径7.0cm。

(5) SK67出土土器

15はほぼ完形に復元される壺である。口唇部を縄文がめぐり、胴上半は縄文の地文と横位櫛描文がヘラ描直線により画せられる文様をもつ。外面はハケからヘラミガキ、内面は口頸部をヘラミガキ、中～下半部をハケで整える。胎土は砂粒を多く含み暗褐色。口径7.8cm、高さ19.7cm、底部径5.6cm。

16は甕の口縁部～頸部である。口唇部を縄文がめぐり、頸部以下は5本単位の櫛描文が縦位横位交互に施される。外面口縁部はナデ、内面はヘラミガキ。胎土は砂粒を含み、外面は黒色で煤が付着し、内面は淡茶色を呈する。口径16.8cm。

60(SK67) 61(SK84) 62(SK114) は同一の壺の胴部片である。逆「J」字形の文様が見られる。胎土は砂を含み、灰褐色。

63は鉢の胴部片である。「ロ」字を重ねた文様。内面はハケ調整で外面には煤が付着する。砂を含む胎土で灰褐色。

(6) SK71出土土器

64は壺の胴部片である。櫛描直線文と櫛描刺突文が太いヘラ描直線にて区画される。胎土は細かい砂を含み、素地の色調は灰褐色だが外表面は暗灰褐色。

(7) SK73出土土器

17は壺の頸部～胴上部である。縄文を地文とし刻み文を有する隆帯・ヘラ描波状文・連弧文・刺突文がヘラ描直線にて区画される。内外面ともにヘラミガキ。胎土は細かい砂粒を含み、灰褐色。

(8) SK75出土土器

18は口縁部と胴中部を欠損する壺である。頸部に刺突文がめぐる。外面下半位にヘラミガキ痕が見られるがその他の部位は磨滅が著しく定かではない。細かい砂粒を含み、赤橙色。

19は完形に復元される甕である。外面ナデ、内面ハケからナデの調整。胎土は砂粒を含み色調は外面が灰褐色、内面は暗灰色。焼成前に穿孔された直径0.9cmの孔を底部にもつ。口径12.7cm、高さ5.7cm、底部径6.0cm。

20は甕の上半部である。5本単位の櫛描文が縦位横位交互に施され、刺突文がめぐる。外面口縁部はナデ調整、内面はヘラミガキ。胎土は砂粒を含み、黄褐色～暗褐色。口径17.0cm。

21・22・23は壺の下部～底部である。21・22は外面をヘラミガキされるが内面は磨滅のためよくわからない。23は外面ハケのちヘラミガキ、内面はヘラミガキ。21・23は細かい砂粒を多く含み、22はやや大粒の砂粒を含む。21は赤橙色、22は灰白色、23は淡褐色。底部径は21が8.0cm、22は5.7cm、23は5.8cm。

65は壺の胴部片である。縄文地文がヘラ描直線にて区画される。細かい砂粒を含み、素地は灰赤褐色だが外表面は黒くくすむ。内面はハケ。

(9) SK123出土土器

24は口縁部を除いて復元される壺である。胴上位から中位にかけ、ヘラ描平行線文と刺突文が交互に配列される。外面はハケのちヘラミガキ、内面はハケ、胎土は細かい砂粒を含み、外面は黒褐色、内面は灰褐色。

25は壺の頸部～胴上部である。頸部は2本のヘラ描平行線文、胴上部は櫛描懸垂文がヘラ描沈線にて区画される周囲を刺突文がめぐる。その下位は櫛描直線文がヘラ描沈線にて区画される。調整は磨滅はげしく定かではない。胎土は砂粒を多く含み、薄手の成形である。黄褐色で胴部に黒斑が見られる。

67は甕の胴部片である。5～6本単位の櫛描羽状文が施文される。細かい砂粒を含み、黄白灰色。

(10) SK134出土土器

26は甕の上半部である。口唇部を縄文がめぐり5本単位の櫛描羽状文が施される。内外面ともハケ。細かい砂粒を含み暗褐色で、外表面には煤が付着する。

(11) その他

27～32は壺の上半部または口縁部～頸部である。27・28・30・31はそれぞれ口唇部に縄文がめぐり、頸部には刺突文(27)、隆帯に縄文(28)または刻み文(30)、ヘラ描平行線文(31)がそれぞれ施文される。27の胴上位は縄文地文に刺突文がめぐる部分と縄文のみの部分とが太いヘラ描沈線により交互平行した帯状に区画されるものである。29は受け口状に立ち上がる口縁に縄文を施文し、2個一対の楕円形山形突起を付けたもの。27・28・30は外面ヘラミガキ、内面ヘラミガキもしくは横ナデ。31は外面ハケ。29・32は磨滅はげしく定かではない。27～32すべて胎土に細かい砂粒を含み、27は暗灰褐色で口径11.8cm、28は暗赤褐色で口径11.7cm、29は黄橙色で口径11.0cm、30・31は黄褐色で口径ともに8.1cm、32は黄橙色で口径9.9cm。

33～39は壺の頸部～胴上半部である。33は頸部に刺突文がめぐる。43・35はヘラ描平行線文が頸部をめぐり、34はさらに縄文と縦位の刺突文が縦位ヘラ描直線にて区画されている。36・37は縄文地文にヘラ描による刺突文・波状文・平行線文・重弧文が組み合わされたものである。36の重弧文の頂点計6か所には円形浮文が付けられる。38は縄文部分と無文部分とが太いヘラ描沈線により交互帯状または「ロ」字形に区画されるもの。39は縄文地文にヘラ描による複合鋸歯文が施文されるものである。調整は全体に外面ヘラミガキが大半を占め内面はハケ・ナデが大半を占める。33～39すべて胎土に砂粒を含み、33・34は黄灰色、35は暗褐色、36は淡黄色、37は暗褐色、38は赤褐色、39は素地が灰褐色で外表面は黒色を呈する。

40～49・51は完形に復元される甕ならびに甕の上半部である。42は口唇部に刻み文をもち、48は無文であるがその他は縄文が施文される。40は波状口縁をもち上半位に縄文を施文する。41・45～48・51は上半位に櫛描羽状文が施される。41・45にはさらに中位に刺突文がめぐる。43・44・49は上半位を櫛描による縦位・横位の直線文あるいは波状文の組み合わせで施文する。44にはさらに櫛による刺突文が、49はヘラ状具による山形文がめぐる。40の外面はハケのちヘラミガキ、内面はハケからナデ。41～51は磨滅で調整のわからないものもあるが内外面ともハケおよびヘラミガキにて調整されるものが多い。それぞれ胎土には砂粒を含み、40は暗灰褐色～黒色で口径14.8cm、高さ19.2cm、底部径は6.3cm。41は外面は黄褐色、内面は白灰褐色、42は淡褐色、43は褐色～黒褐色、44は黒色で43・44ともに外表面に煤が付着する。45は灰茶色、46は灰褐色、47は灰黒色～黒色、48は灰褐色～黒褐色、49は黄褐色、51は暗褐色。口径はそれぞれ41が28.6cm、42は26.8cm、43は18.0cm、44は14.4cm、45は18.0cm、46は19.0cm、47は16.2cm、48は15.3cm、49は10.8cm、51は19.6cm。

50はヘラ描平行線文が胴上位に施される壺頸部で、赤褐色を呈し、口径9.8cm。

52～55は壺ないし甕の胴下半～底部である。それぞれ内外面ともハケからヘラミガキで調整する。すべて砂粒を含む胎土だが55はやや大粒の砂を含む。52・54は素地は灰褐色だが外表面は黒くくすむ。53・55

は内外面とも黒ずんでいる。底部径は52・53が7.0cm、54は7.2cm、55は5.6cm。

56は甕の底部である。直径0.9cmの円形の底部孔は焼成前に穿孔されたもの。内外面ともにヘラミガキ。胎土は細かい砂粒を含み、赤褐色～黒色。底部径は6.0cm。

57・58は下位および底部を欠損する片口鉢である。外面はナデあるいはヘラミガキ、内面はハケからナデ。ともに砂粒を含む胎土で57は外面が淡褐色で内面は黒色。58は全体に暗灰褐色。口径は57が12.8cm、58は22.4cm。

68～71は壺の頸部片である。68～70は隆帯に刻み文ないし縄文が施文される。71は刺突文のほか直径0.3cmの孔を2孔もつ。ヘラミガキあるいはナデ調整が大半と思われる。ともに胎土に砂粒を含み、68は黄褐色、69・70は淡褐色、71は素地が淡褐色だが外表面は黒くくすむ。

72～88は壺の胴部片である。72・73ならびに76～78はそれぞれ同一個体片と思われる。72・73は細いヘラ描平行線文が施文され、74～79は縄文地文上にヘラ描による重山形文・平行線文・刺突文・重弧文がそれぞれ組み合わされ施文される。80～82は太いヘラ描平行線文・櫛描直線文・櫛またはヘラ状具による刺突文が組み合わされ、施文されるものである。83は櫛描直線文・刺突文を充填するヘラ描「三角」形文が認められる。84はヘラ描による「ロ」字形文に刺突文を充填する。85～88はヘラ描重弧文に縄文ないし刺突文が組み合わされるもの、87には楕円形突起がある。調整は外面にヘラミガキ痕の見られるものが多く、内面にはハケないしナデ痕が見られる。それぞれ胎土に細かい砂粒を含み、72・73は外面が黒灰色で内面は灰褐色、74～78は灰褐色、79は素地は赤橙色だが外表面は赤褐色、80は素地が淡赤褐色で外表面は暗灰褐色。81は外面が黒色で内面は灰黒色。82～86は灰黄褐色～灰赤褐色。87・88は外面は黒色を呈するが内面は灰黄褐色。

89～96は甕の口縁部片および胴部片である。89の口唇部は縄文が、90・91の口唇部には指頭押捺文が施文される。それぞれの頸部ないし胴部には櫛描による重山形文・直線文・波状文・羽状文・簾状文が見られる。92・94には刺突文が施される。内面をそれぞれハケないしナデで調整する。すべて砂粒を含み、89～92は灰褐色～黒色を呈し、煤の付着が見られる。93・94は内外面ともに赤褐色、95は灰黄色、96は灰褐色。

⑫ 小　結

以上の土器は弥生時代中期栗林式に属するもので、栗林式でも古い段階である。特に39などは古いものであろう。出土土器については今後詳細な検討が必要である。

B 石製品

ＳＫ125より緑色凝灰岩製の管玉が2点出土している。ともに弥生時代のものとしては大型である。

1は断面形が円形でなく磨痕が多面形に残っている。直径0.6cm、長さ2.9cm、重さ2.2g。

2の磨痕は1ほど顕著ではなく断面形は円形に近い。直径0.65cm、長さ2.1cm、重さ1.7g。

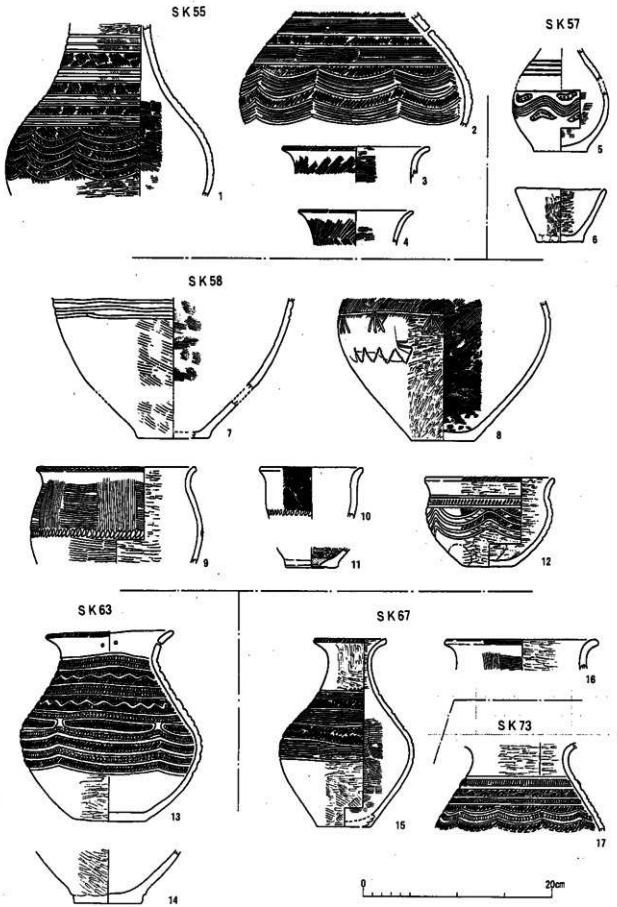


図31　弥生時代の土器1　1:4

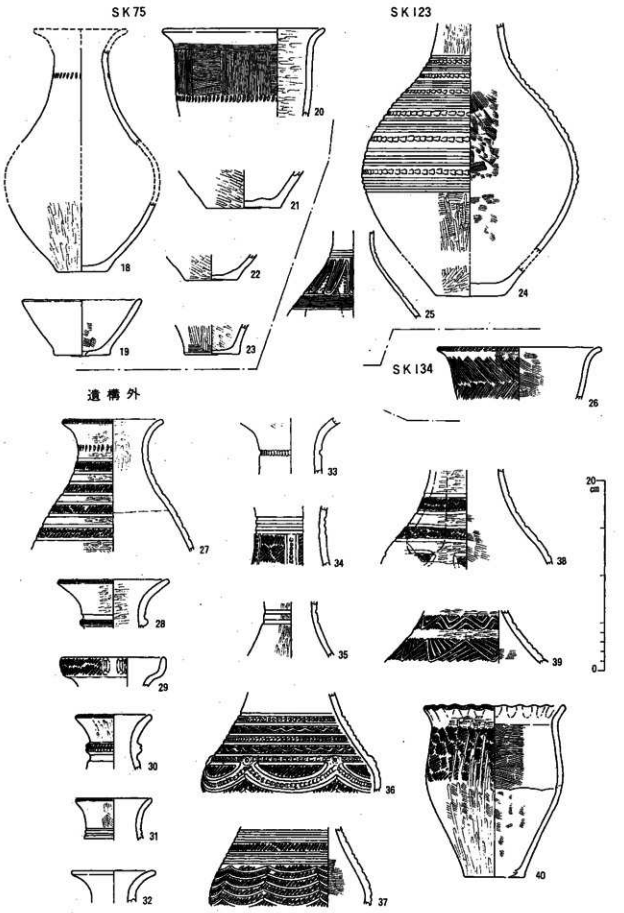


図32　弥生時代の土器2　1:4

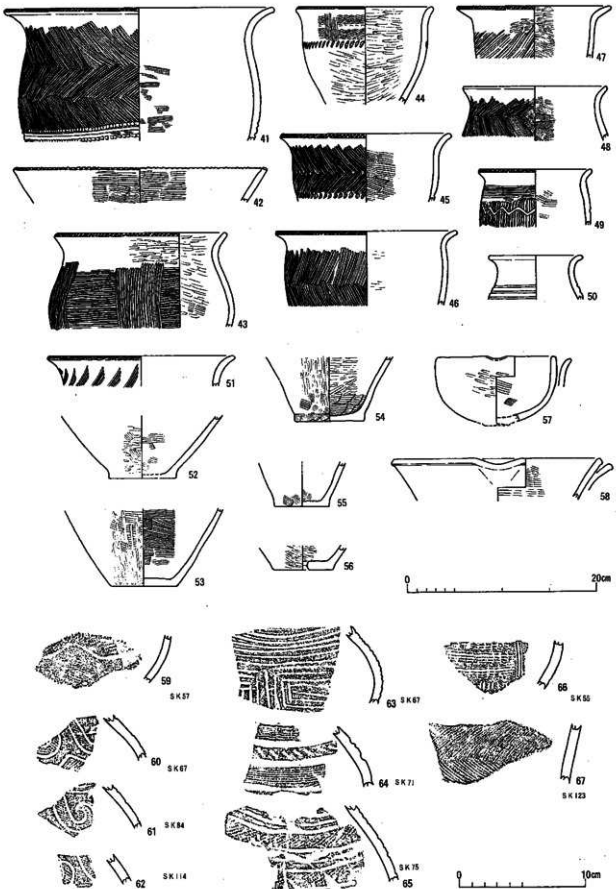


図33　弥生時代の土器3　1:4　1:3

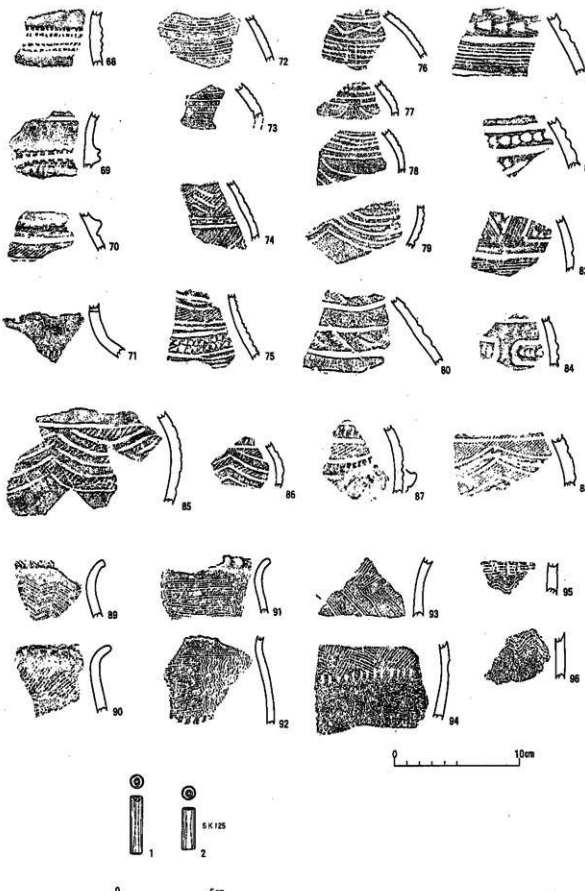


図34　弥生時代の土器4　1:3　管玉 1:2

第5章　平安時代

1　遺　構

A　竪穴住居址

平安時代の竪穴住居址は2棟検出されている。2棟は調査地の南部で方向を同じくして並んでいる（図35）。北の1棟（H33号住居址）は一辺約5mをはかり上野遺跡では大型の部類に入る。南の1棟（H32号住居址）は約4m×3.4mの小型住居で上野遺跡では普通のものである。両住居址の間隔は約8mで、間に大型掘立柱建物址SB17がある。この掘立柱建物と竪穴住居は軒が近接しており同時存在は考えられない。掘立柱建物出土土器がごく少なく土器での年代比較はむずかしい。両者の前後関係については今後の課題である。

(1)　H32号住居址（図36）

33S・T～12区にある。方位はほぼ南北である。南北3.4m×東西約4.2mの長方形プランだが、北辺と東辺はやや中央がふくらむ。また東南隅は「L」字形に内に入り込む。床面積は約14㎡、約8畳分となる。壁の立ちあがりは垂直ではない。住居内には柱穴に比定できるピットP8・P9・P10などがあるが、主柱穴とするには根拠が弱い。

P1～P4は浅いレンズ状のピットである。P1～P3は焼土を多く含み、完形に近い坏を含む遺物が多く出土している。

カマドは北辺西端に構築されている。特色は石で囲んだ両側に黄色粘質土を置いて壁体としていることで、上野遺跡では初めての例だ。石は西壁に1個、東壁に3個が立てられ、中央に支柱を立てている。石の用い方はこれまでの例に等しい。なおもともとはより多くの石が使われていたものと思わ

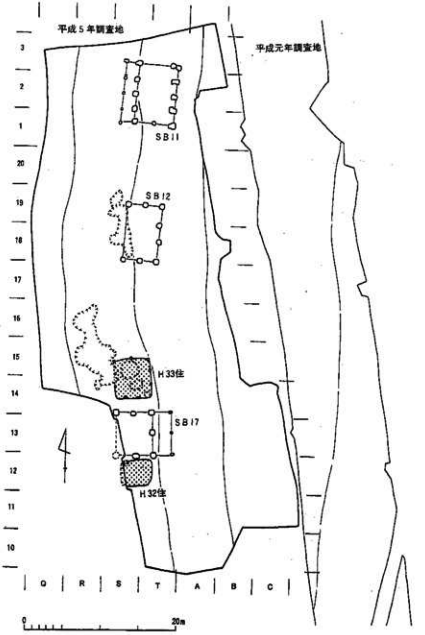


図35　平安時代遺構分布図　1:500

れる。カマドの内法は幅約50cmで、支柱の前の床はよく焼けていた。カマド内には完形に近く復元できた個体はないものの土師器甕や須恵器甕が大破片で多く出土している。

住居址の埋土は自然堆積の状態で、遺物はカマドのある北側を中心に少量出土している。

(2) H33号住居址（図37・38）

33S・T－14・15区にある。方位はほぼ南北である。住居内および西辺は大きく撹乱されている。東西4.9m×南北5.3mの略方形プランであり、床面積は約26m²、畳約15畳分となり上野遺跡では最も大型である。

主柱穴は壁に接しており、配置に特色がある。南辺はP1・P4の2か所でP1・P4とも2個の穴がある。東辺はP3・P5・P16で、P3は2個の穴がある。西辺は東辺に対応しており、P2・P9・P8でP2が2個の穴がある。北辺はP71か所のみである。これらの柱穴は直径約30cm、深さ60cm以上で他の住居址例に比べ大きくしっかりしている。

南辺のP1・P2の間にあるP10・P11はあるいは入口等の施設か。

カマドは検出されなかったが、南東隅に焼土が集中し、カマドに使用されたと考えられる焼けた角石が出土しているので、南東隅に石で構築されていたものと考えられる。

P17～P19は浅いレンズ状のピットで、P17からは完形ないしそれに近く復元できた坏が並べて置かれたような状態で出土しており、土器片の出土もここに集中している。住居廃棄時の祭祀ピットであろう。

住居址埋土内からは撹乱もあってほとんど遺物は出土していない。

B　掘立柱建物址（図39・40）

平安時代の掘立柱建物址は、SB11・12・17の3軒が検出されている。掘立柱建物としては大規模なものであり、柱穴も深くしっかりしている。特にSB11とSB12は、桁行方向が同一で一線上に並び、約10mの間隔で隣接しており、同時期の建物としてその関連を考えたい。

11号掘立柱建物址（SB11）

28ST－1・2・3区において検出された。柱穴ピット状況から建て直しをしたと推測される。P1～P5、P6～P10の列は建物本体の柱穴であり、P11～P15の列は廂と考えられる。本体のみの建物をSB11a・庇の柱穴と対応する建物をSB11bとした。P10を軸にして約8度建物がずれている。同規模の建物を建てるのに、同じ柱穴を使わずに掘り直しをしているということになるが、時間的に前後しているものと考えられよう。

SB11a　2間×4間の建物で、梁行500cmで南側中間に間柱1本が入っている。桁行は800cmで間柱間隔は180cm～200cmである。深さ30cm～70cmを計る。遺物の出土は小片が少量で、図示できたのはP1出土品1点のみである。

SB11b　2間×4間の建物に廂のついた建物と考えられる。廂（P11～P15）は西側に170cm出ている。間隔は210cmで、深さ30～60cmを計る。P13を中心に左右に振り分け、本体建物より桁行が長い。

12号掘立柱建物址（SB12）

33S・T－18区を中心に検出された。梁行2間×桁行3間、450cm×720cmの建物である。間柱が入るが、西側は撹乱によって検出されなかった。深さ10cm～50cmを計る。ピット内からは土器の小片が僅かに検出された。

17号掘立柱建物址（SB17）

33S・T－13区で検出された。調査区外にかかるため、全体については不明である。廂と推測される柱穴が東側に検出されている。P1～P6間隔は240cm、P1～P3間隔は290cm、深さ50～70cmを計る。廂

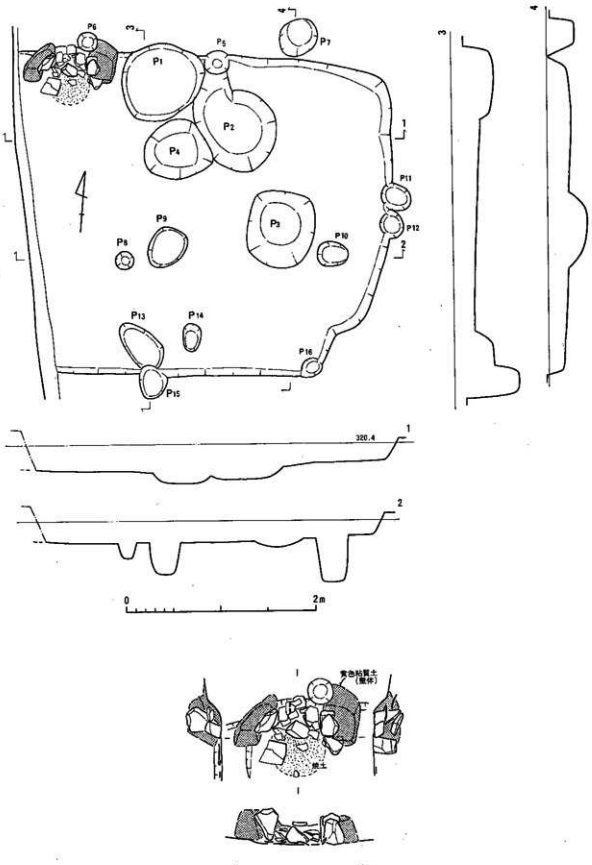


図36　H32号住居址 1:40　かまど 1:30

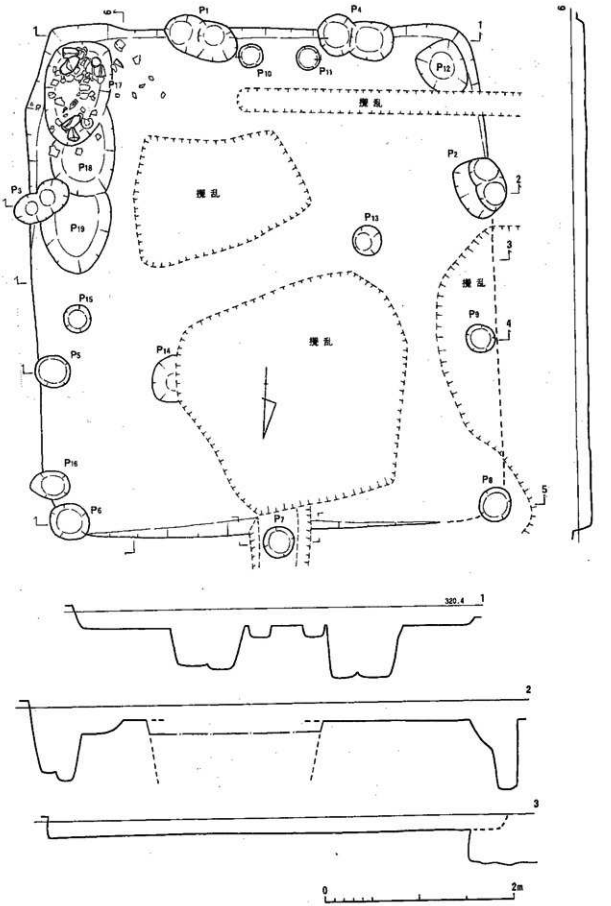


図37　H33号住居址1　1:40

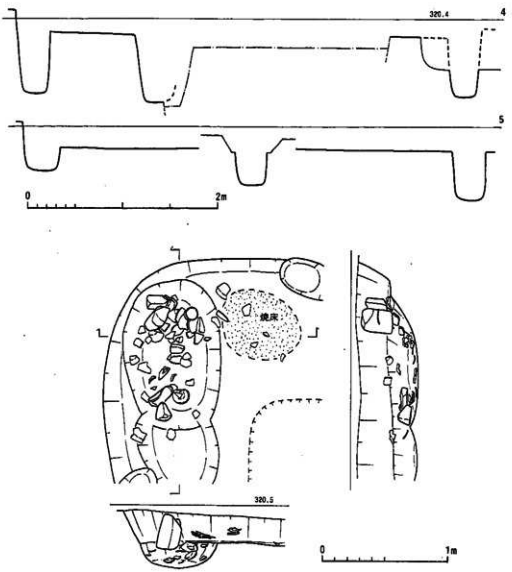


図38　H33号住居址２　1:40　かまど 1:30

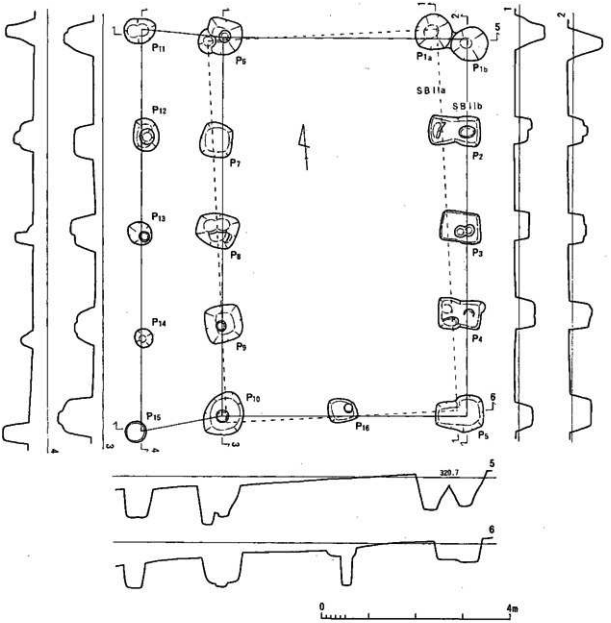


図39　掘立柱建物址ＳＢ11　1:80　基準レベルはすべて320.7m

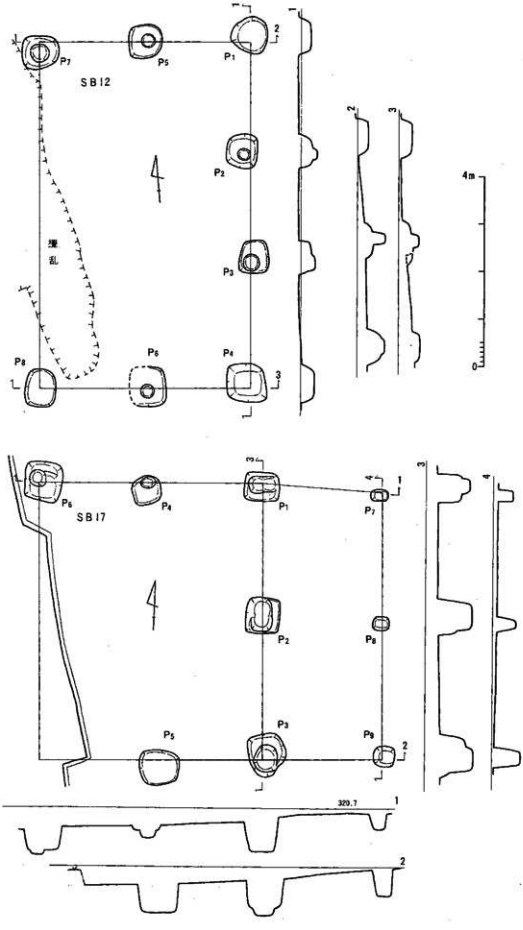


図40　掘立柱建物址 SB12　SB17　1:80　基準レベルはすべて320.7m

は250cm本体建物より出ている。深さ30～55cmである。

2 出土遺物

平安時代の遺物は竪穴住居址からほとんどが出土し、他は少ない。ここでは竪穴住居址出土遺物を中心に説明することとする。

A 土 器

(1) H32号住居址出土土器（表3 図41・42）

黒色土器・土師器・灰釉陶器・須恵器がある。

黒色土器 坏・皿がある。坏は口径15cmの大型品（1）と、口径12～13cmの中型品（2～8）がある。形態は体部が内湾するタイプのものであり、須恵器坏のように底部と体部の屈曲がシャープで体部が直線的なものや、底部径が小さく体部が直線的に外方に開き浅いものなどはない。底部調整は判明するもの7点のうち2点がヘラケズリ、5点がロクロ糸切り痕をそのまま残す。

高台付の坏は2点(10・11)あり、10には底部外面に墨書がある。この文字は「常」の変形のような文字で今のところ判読できないが、平成4年度調査のH17号住居址出土黒色土器坏の外底面に非常によく似た例がある（図42・47）

皿(10)は1点あり、高台が付くものである。

土師器 坏・甕・盤がある。坏(12・13)は黒色土器坏と形態的に等しい。底部調整は判明するもの2点ともヘラケズリである。

甕は小型品(14)と中型品(15～19)がある。小型品は平底で底部外面をヘラケズリする。中型品は口縁部が短くやや受け口状になるもので口径23cm前後である。胴部内面はハケを施すものが多い。中型品の底と思われるものに確実な平底はない。

盤(20)は脚の付くもので、H33号住居址出土例(38)に形態・胎土・焼成・色調ともに非常によく似ている。

灰釉陶器 椀・小壺がある。21は口径18.6cmをはかる大型品である。釉は刷毛塗りで、胎土は22・23に比べ粗い。見込みは顕著な磨痕はないが朱墨らしきものが付着している。22は21より小型品である。胎土は非常に緻密である。23は小壺で胎土は22に等しい。肩部の灰釉は刺げているがもとは全面に施釉されていたものだろう。これらは猿投窯黒笹90号窯式期に比定される。

須恵器 甕がある。24～26はいずれも大甕の破片である。外面は格子ないし平行タタキで、内面にあて具痕が残る。

(2) H33号住居址出土土器（表3 図42）

黒色土器・土師器・灰釉陶器・須恵器がある。

黒色土器 坏・皿がある。坏は口径15cmの大型品(27)と、口径12～13cmの中型品がある。形態は前述のH32号住居址例に近似している。底部調整は判明するもの11点のうちロクロケズリ2点、ヘラケズリ6点、ロクロ糸切り痕を残すもの3点で、ケズリの割合が高い。

皿(34)は1点のみである。高台が付く。

土師器 坏・甕・盤がある。坏は1点のみで、図示していないが体部が内湾するものである。

甕は3点と少なく、35は中型品、36は小型品で、37は甕口縁部として図示したが、何かの脚の可能性がある。

盤(38)はほぼ完形に復元できたものである。脚に3か所の透し孔があり、透し孔の外周辺にヘラケズリ

を施している。体部外面下半に一周するヘラケズリを加えていることも特色である。

灰釉陶器　皿・蓋がある。皿(39)は口径20㎝の大型品である。胎土はH32号住居址21と同じく緻密でない。

蓋(40)は擬宝珠様のつまみ部分である。胎土は39同様緻密ではない。

須恵器　坏・瓶・壺がある。41は灰白色軟質の須恵器だが、形態・成形手法ともに黒色土器坏に等しい。42は瓶の肩部片で灰緑色の釉が垂れている。43は格子タタキをもつ胴部片で、四耳壺の胴部片と考えられる。

(3)　SB11出土土器（図42）

平安時代に比定される掘立柱建物址の柱穴からも小片が少量出土している。図示した45はＳＢ11Ｐ１出土で口径13.6㎝をはかる黒色土器坏で、竪穴住居址出土品と形態がよく似ている。

(4)　小　結

H32・33号住居址出土土器は、その組成において、供膳形態に占める黒色土器の割合が高く、須恵器坏はごく少量で、土師器・灰釉陶器が少量であること、煮沸器に土師器の甕を用い、須恵器の大甕を貯蔵器としている点で、これまでの上野遺跡での竪穴住居址出土土器と基本的に等しい。

ただ黒色土器坏の形態や、底部調整でヘラケズリやロクロケズリを加えるものの比率が高い点では、上野遺跡内では古い段階の10世紀前半代に位置づけられる。

B　土製品・石製品・他（図42・ＰＬ16）

ふいご羽口(44)・鉄滓（ＰＬ16・47・48）・軽石(46)がある。ふいご羽口はH33号住居址より１点出土、口は熔変している。鉄滓は２点あり、47が28Ｒ－２区出土で31.2g、48が33Ｓ－１区出土で21.7g。軽石は34Ｂ－15区出土で23.1g。

H32号住居址

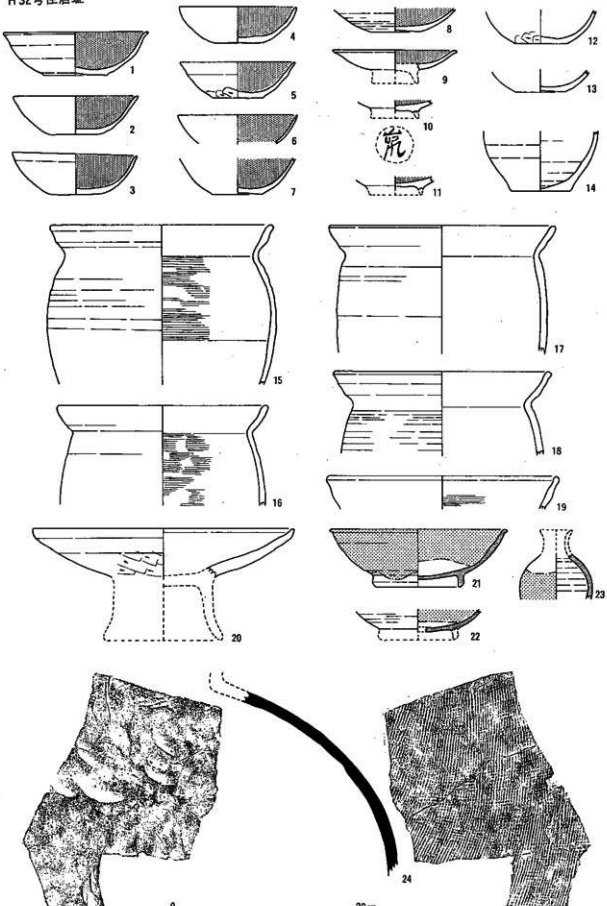


図41　平安時代の遺物1　1:4

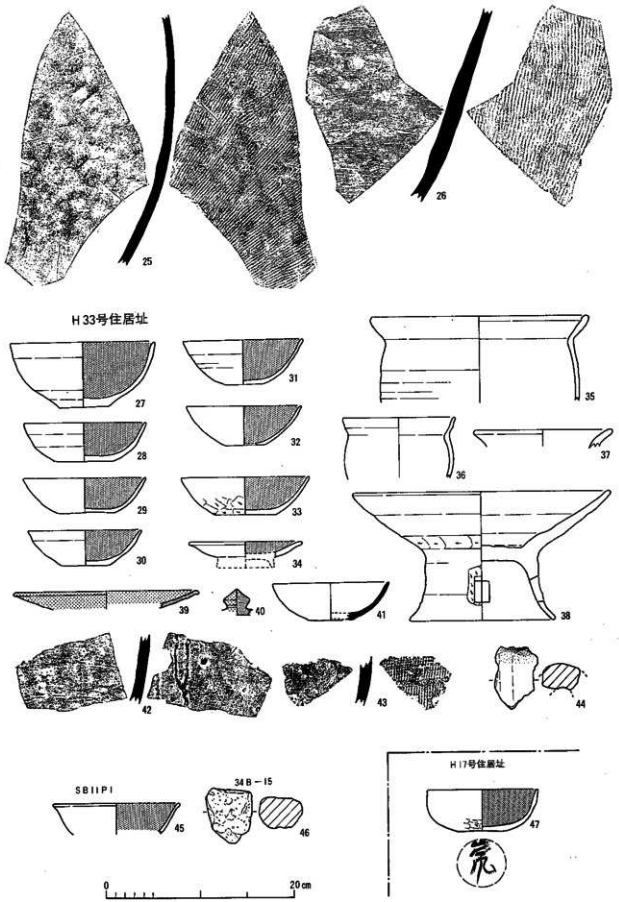


図42　平安時代の遺物2　1:4

表３　平安時代竪穴住居址出土土器一覧表（単位cm）

※糸切りはすべてロクロ糸切り

H32号住居址出土土器

器種	器形	図番号	口径	器高	底径 胴径	底部調整・他	備　考
黒色土器	坏	1	15.3	4.6	6.6	糸切り痕残る	残50%
		2	13.1	4.1	4.8	マメツ不明	残75%
		3	13.1	4.3	5.4	〃	残70%
		4	12.3	3.9	5.0	糸切り痕残る	残75%
		5	12.2	3.8	5.3	ヘラケズリ	残60%
		6	12.6	—	—		器壁うすい
		7	—	—	5.2	糸切り痕残る	残45%
		8	—	—	5.4	〃	
			13.0	—	—		
			12.8	—	—		
			—	—	5.0	ヘラケズリ	
			—	—	5.2	糸切り痕残る	
		10	—	—	—		高台付 墨書あり
		11	—	—	—		〃
	皿	9	13.0	—	—		〃
土師器	坏	12	—	—	5.6	ヘラケズリ	
		13	—	—	5.0	〃	
			13.0	—	—		
	甕	14	—	—	6.2	ヘラケズリ	小型甕
			—	—	—	胴下半 ヘラケズリ	〃
			—	—	—		〃
		15	23.4	—	24.0	胴内面ハケ	
		16	22.2	—	—	〃	
		17	23.8	—	22.4		
		18	23.0	—	21.4	胴内面ハケ	
		19	24.0	—	—		
			22.2	—	—		
			21.0	—	—		
			24.2	—	—		
			22.4	—	—		
	盤	20	28.0	—	—	胴外面ケズリ	
灰釉陶器	椀	21	18.6	6.1	9.0	体外面ロクロケズリ	刷毛塗り
		22	—	—	—		見込みに塵抜

	器形	図番号	口径	器高	底径 胴径	底部調整・他	備　考
	小壺	23	—	—	7.7		
須恵器	甕	24	—	—	—	格子タタキ	灰色硬質
		25	—	—	—	平行タタキ	灰緑色自然釉かかる
		26	—	—	—	平行タタキ	茶灰色自然釉かかる

H33号住居址出土土器

器種	器形	図番号	口径	器高	底径 胴径	底部調整・他	備　考
黒色土器	坏	27	15.2	6.8	5.0	ロクロケズリ	残60%
		28	12.9	4.1	6.0	糸切り痕残る	残80%
		29	13.0	3.8	5.9	糸切り痕残る	残65%
		30	12.0	3.8	5.0	マメツ不明	残60%
		31	12.6	4.7	4.0	ヘラケズリ	残65%
		32	12.1	4.1	4.0	ヘラケズリ	
		33	13.6	4.0	5.4	ヘラケズリ	
			12.6	—	—		
			14.4	5.0	5.8	マメツ不明	
			13.4	5.4	—	ヘラケズリ	
			15.0	—	—		
			—	—	5.2	ヘラケズリ	
			—	—	5.0	〃	
			—	—	5.6	ロクロケズリ	
			—	—	5.3	糸切り痕残る	
			—	—	7.2		高台付
	皿	34	12.0	—	—		高台付であろう
土師器	坏		13.0	—	—		
	甕	35	23.2	—	21.2		
		36	11.9	—	11.4		小型甕
		37	14.6	—	—		脚かもしれない
	盤	38	27.4	13.5	15.5		脚に３か所の透し孔あり
灰釉陶器	皿	39	20.6	—	—		
	壺	40	—	—	—		つまみ部
須恵器	坏	41	12.3	3.9	4.7	糸切り痕残る	灰白色 軟質
	瓶	42	—	—	—		緑灰色自然釉かかる
	壺	43	—	—	—	格子タタキ	四耳壺か

第6章　縄文時代・中世

1　縄文時代

A　遺　構（図43）

確実に縄文時代の遺構に位置づけられる遺構は検出されていないが、前の調査報告書（小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅱ・1990飯山市教育委員会）において、縄文時代の遺構と位置付けた溝状土坑（『Tピット』、『溝状ピット』とも呼称される）が11基検出されている。この溝状土坑の配列状態は、ほぼ主軸を水平線に、並びを最大傾斜線にそって掘られている。またその配列は一定間隔で列をなして並ぶという特徴を持っている。今回の調査で検出された11基の溝状土坑は、3つの列に分けることができる。

第1の列は、先の調査で検出された東からＭＳＫ8・7・6に続く、ＳＫ53・54・77・112・113の列である。

第2の列は、ＭＳＫ11・10に続くＳＫ111・110・138・131・132の列である。

第3の列は、ＭＳＫ12に続くＳＫ137である。いずれの土坑からも遺物は検出されていない。ＳＫ77は平安時代の建物ＳＢ11に切られており、ＳＫ138はＨ33号住居址によって切られている。

(1)　第1の列

ＳＫ53・ＳＫ54はＡ－3区に位置する。ＳＫ53は290㎝×30㎝を測り、確認面からの深さ（以下深さと言う）は100㎝である。ＳＫ54は、280㎝×30㎝、深さ85㎝を測る。

ＳＫ77は、Ｓ－3区に位置し、320㎝×30㎝、深さ100㎝で、ＳＢ11に切られている。

ＳＫ112は、Ｒ－2・3区に位置し、330㎝×30～40㎝、深さ90㎝である。

ＳＫ113は、Ｑ－2・3区に位置し、320㎝×30～40㎝、深さ85㎝を測る。

ＭＳＫ8～ＳＫ54は、3～4ｍの間隔をもって列をなし、ＳＫ54とＳＫ77は5.5ｍ、ＳＫ77とＳＫ112とは6ｍとやや間隔があいている。さらに、ＳＫ112からＳＫ113とは、4.5ｍの間隔があり、やや南にずれて位置している。見方によってはこの一連の列は、掘り下げられた断面にそれぞれ共通点が見出されることと、わずかにその配置にずれがあることから、ＭＳＫ6・7・8と、ＳＫ53・54・77、ＳＫ112・113の3つの群に分けることもできよう。

(2)　第2の列

ＳＫ111は、Ｂ－14区に位置するが、調査区外へ延びるためその規模は不明である。深さ約75㎝である。

ＳＫ110は、Ａ・Ｔ－15区にまたがって位置し、300㎝×30㎝、深さ95㎝を測る。

ＳＫ138は、Ｓ－15区に位置し、380㎝×30㎝、深さ55㎝を測る。

ＳＫ131は、Ｑ－16・15区に位置し、300㎝×85㎝、深さは85㎝を測る。

ＳＫ132は、Ｑ－16区に位置するが、調査区外に延びているため、その規模は確認できない。ＳＫ131と50㎝間隔で隣接している。

この列は土坑間隔が他に比べて長く、ＭＳＫ11～10は8.5ｍ、ＭＳＫ10～ＳＫ111は10ｍ、ＳＫ111～ＳＫ110は11ｍ、ＳＫ110～ＳＫ138は約8ｍ、ＳＫ138～ＳＫ131は9.5ｍ、ＳＫ131～ＳＫ132の間隔は50㎝である。また、その配列はおおよそ一列に並んでいるものの不揃いであり、第一の列のように群別はできない。

(3)　第3の列

ＳＫ137は、Ａ－10区に位置するが、調査区外に延びているため、規模は不明である。

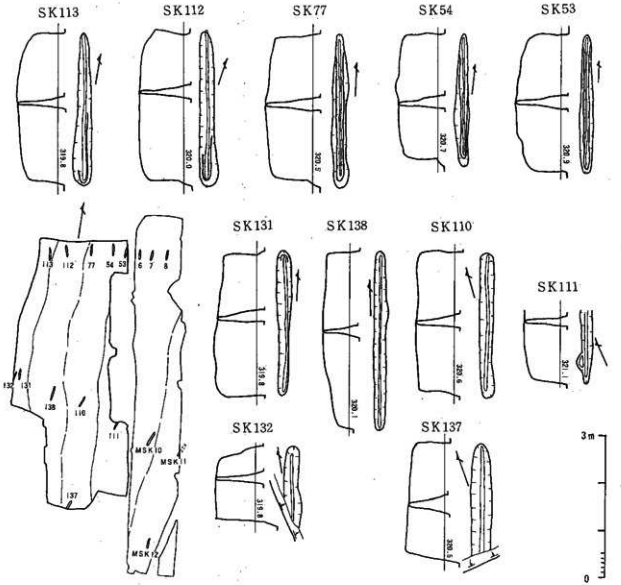


図43　縄文時代の遺構　1:80

またＭＳＫ12とＳＫ137は一連の列を成すものと推定され、両者の間に1～2基の溝状土坑存在することが想像されるが、調査区外のことであるので定かではない。

B　出土遺物

前期の土器が34Ｃ－12、29Ａ－2、28Ｓ－2、33Ｔ－20、33Ｔ－20に単片的に、中期の土器が33Ｑ－20区に1片出土している。また、後期の土器が34Ａ－13区に数片出土している。

(1)　前期の土器

1は、底部片である。僅かに内側に入り込みながら立ち上がりをみせ、外側は上からヘラでナデ下ろして張り出しを作っている。文様は、垂直及び斜めに平行沈線を施した集合沈線である。胎土には白砂及び粒の粗い砂が混じる。焼成は良く、黄色がかった赤褐色を呈している。前期末におかれる。

2は、左下がりの斜縄文がある大型の深鉢の体部片で、胎土に白い砂状の粒子を含んでいるが、よく精製された土を使い、焼成もよく、黄褐色を呈している。わずかに石英が混じりキラキラする。内側は使用

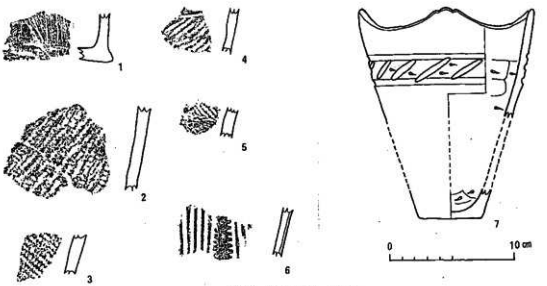


図44　縄文土器　1：3

により僅かに摩耗している。

3は、右下がりの斜縄文のある、中型深鉢の体部片である。石英混じりの大粒の粒子のある胎土を使って作られている。焼成はよく赤褐色を呈している。ほとんど使用されておらず内外とも摩耗していない。

4は、小型の鉢の小片と思われる。左下がりの縄文に沈線の区画が見られる。内面のナデ痕もはっきりとしていて、摩耗は少ない。

5は、結束縄文が見られる。極めて小片のため確定しがたいが、深鉢の体部片と思われる。白砂が混じる赤褐色の土器片である。

(2) 中期の土器

6は、半截竹管による半隆起線文を縦に数本深く施し、半隆起線文の縁に刺突文の見られる深鉢の体部片である。胎土には少量の白砂と、極小の石英が混じりキラついている。外側は赤褐色を呈し、内側はやや黄味を帯びる。中期前葉のものであろう。

(3) 後期の土器

7は、小型の深鉢の口縁部分と底部片である。出土地点が農道によって攪乱されていたため、胴体部分は欠落している。口縁は大きく4つの波状形を呈し、頂部両側に小さな切れ込みがみられ、富士山状を呈する。やや下がったところに2本の太い沈線を横に間隔をあけて引き、その間を同じ太さの沈線で、斜め左下がりに施文している。縄文は見られない。胎土には白砂を混ぜている。内側表面は特に丁寧なナデが施されている。焼成は良いが、断面が黒く、表面は白味を帯びた黄褐色を呈している。

2 中　世

遺構はないが、銭貨が黒色土上層から2点出土している（PL16）。

表4　銭　貨

銭名(字体)	初鋳年(西暦)	時代	法量 直径	法量 重さ	出土地区	備考
天禧通寶(真)	天禧年間(1017～22)	北宋	2.4cm	2.1g	34B－14	亀裂 文字不鮮明 摩耗
熙寧元寶(真)	神宗熙寧元年(1068)	北宋	2.5cm	2.4g	34B－12	文字不鮮明 外輪郭腐食

第7章　ま　と　め

過去4回の調査をとおして、上野遺跡は飯山地方における重要な遺跡の一つであることが確認されている。今回の調査でも旧石器時代、弥生時代、平安時代の貴重な遺構・遺物が発見された。以下、簡単に今回調査の成果について触れてみよう。

旧石器時代についてみれば、3箇所の礫群が発見された。第1回の調査以来、これで8箇所の礫群が発見されたことになる。3箇所の礫群の中、あるいは地区単独出土の旧石器時代の遺物は総数30点である。今回の調査で、新たに礫群や遺物が発見されたことは、本遺跡の他地点にも旧石器時代の遺物が存在することを暗示している。従って、上野丘陵全体に旧石器時代の遺跡が広がっていることは確実であろう。対岸の日焼遺跡とともに、飯山地方最大の旧石器時代の遺跡といえよう。

縄文時代では、遺構としては溝状土坑11基が発見されただけである。出土遺物も縄文前期、中期、後期所属の少量の土器破片のみであった。5回にわたる調査で少量ずつではあるが、縄文時代の土器破片が出土していることからみて、丘陵のどこかに縄文時代の住居が営まれたものと思われる。

今回の調査で最も大きな成果は、弥生時代中期後半のものと推定できる木棺墓群の発見であろう。約600㎡内に60基に達する木棺墓と5基の土坑墓が発見された。そして、これ等の木棺墓は、竪穴住居址と重複せず、木棺墓自体の切り合いもなく、計画的に配置された状態を示していることから墓域として設定されたものと考えて間違いないであろう。近時調査した、長峰丘陵上の小泉遺跡群でも90基の木棺墓群が発見されている。これも弥生中期後半に属するものである。上野遺跡と小泉遺跡群は、常盤平を介しているだけで距離的にさほど距っていない。今後、飯山盆地北半に分布する弥生中期遺跡とどのようなかかわり合いの中で、両木棺墓が形成されたものかを究明することが重要な課題となるであろう。その他の遺構では掘立柱建物址5棟が発見されている。遺物では、弥生中期後半所属の土器が比較的多く出土しており、資料的にみてもきわめて良好である。今後、小泉遺跡群出土の弥生中期後半の土器とともに飯山地方の弥生中期後半の型式設定の際の重要資料となるであろう。他に木棺墓内より2個の管玉が出土している。

平安時代の遺構としては、竪穴住居址2軒と掘立柱建物址3棟が発見されている。竪穴住居址は、1例が本遺跡に通常認められる小形のものであり、他の1例は今まで発見された住居址の中では最大の規模を有する大形のものである。掘立柱建物址は、従来発見されているものより大形であり、柱穴も深くきちんとしている。平安時代集落の中心的存在を示す遺構と考えてもよいであろう。

以上のように今回の調査も、過去4回の調査に劣らぬ成果が得られた。そして、上野遺跡の重要性がますます高まったといえよう。

しかしその反面、上野の自然破壊が一段と進んだことも事実である。破壊を免れた自然を今後どのように保護し、それなりに相応しい景観をつくりあげていくか。そして、調査で得た大きな成果をどのように地域の活性化と結合させていくのか。考えていかねばならない課題は多い。

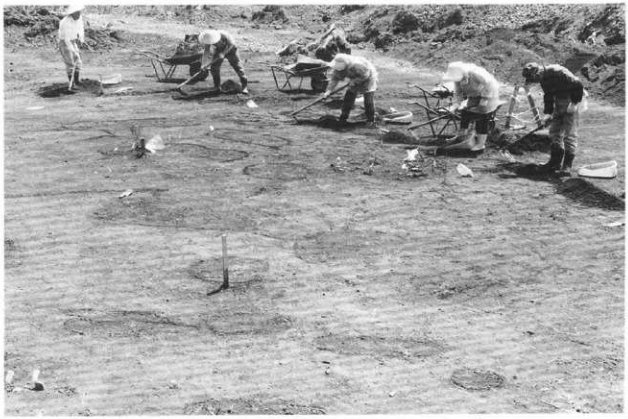
末尾ながら、調査にご協力たまわった上野地区の皆さん、直接作業に従事された作業員の皆さんに心より感謝申上げる次第です。

PLATE

▲ 遺跡航空写真

▲ 表土除去後の状況（南から）

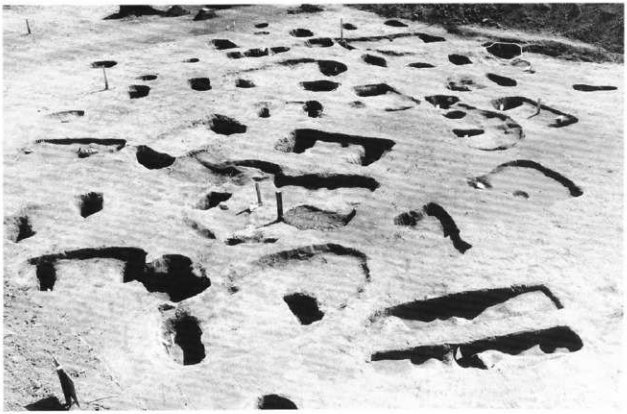
▲ 調 査 状 況（北から）



▲ 遺構確認

▲ 遺構確認（木棺墓の木口痕がみえる）

▲ 調査区　北側



▲ 33区　木棺墓群

◀ SB11

▲ SB11, P1

▲ SB11, P6

◀ SB12, 13

◀ SB14

◀ SB15, 16

◀ SB17

▲ SB17, P7

◀ SB18

◀ H32住表面確認

▲ H32住カマド

◀ H32住調査状況

◀ H32住完掘状態

◀ H33住

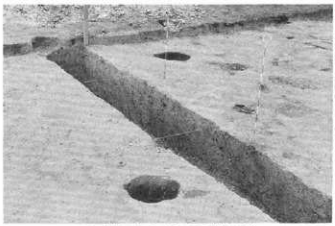
◀ H33住 土器出土状況

◀ H33住 実測

◀ 6号礫群

◀ 7号礫群

◀ 8号礫群



▲ 土層調査（テフラ層下面）

▲ 土層調査

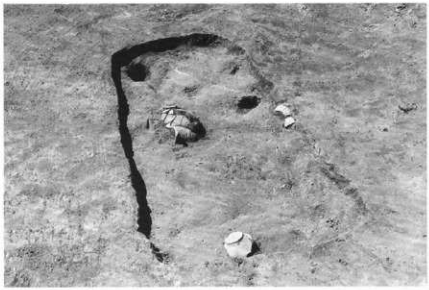
◀ SK55　土器出土状況

▲ 銭貨出土状況

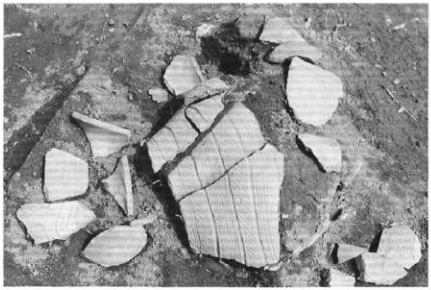
◀ SK56　土器出土状況

◀ SK58　土器出土状況

◀ SK63　土器出土状況

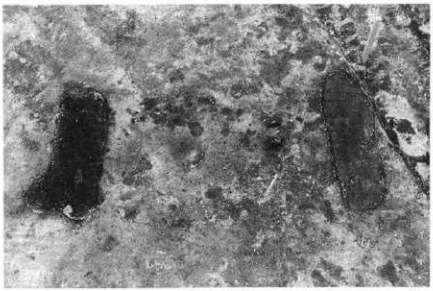


▲ SK57



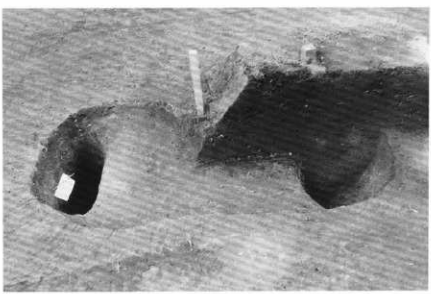
◀ SK67　土器出土状況

▼ T—18

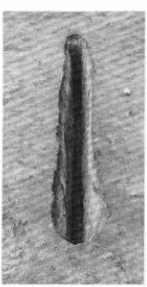


▲ SK125　管玉出土状況

◀ SK125 木口痕



◀ SK71 土層

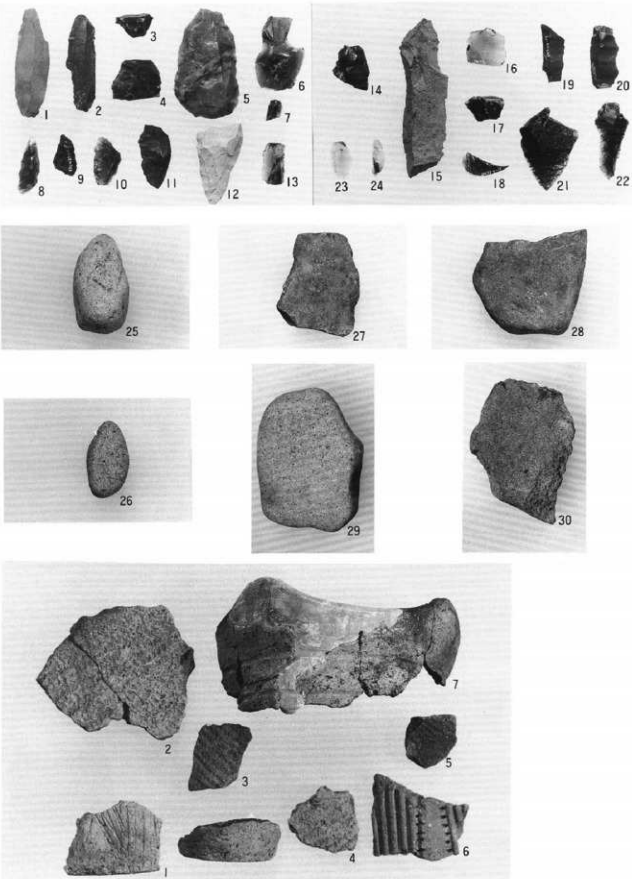


SK112

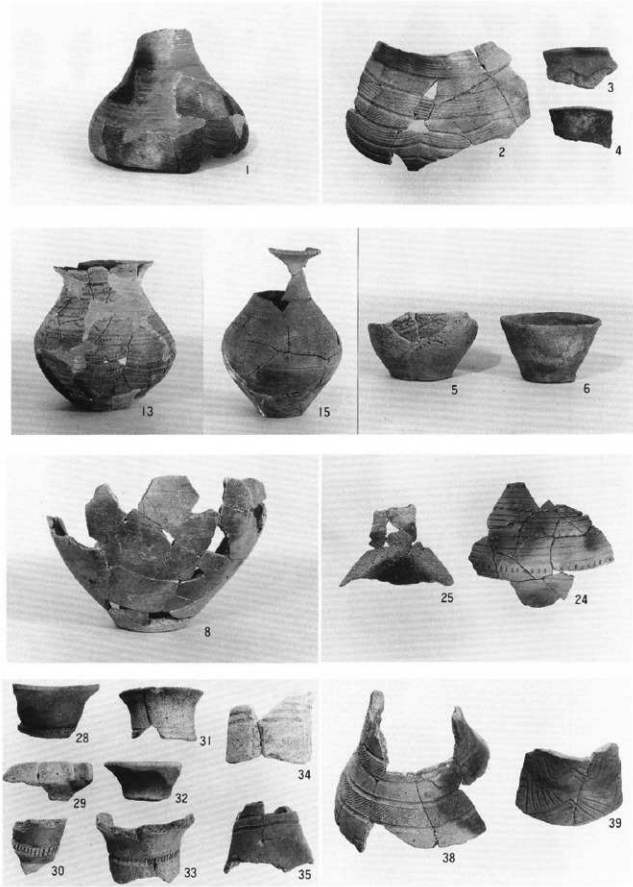
SK113

SK110

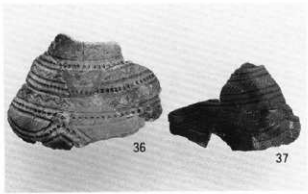
SK137

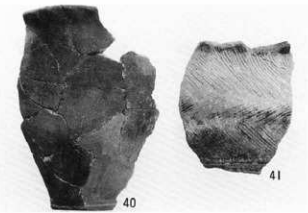


▲ 旧石器・縄文時代の土器 （番号は挿図の番号と同じ）

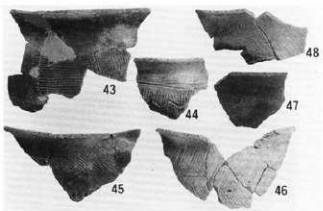


▲ 弥生時代の土器

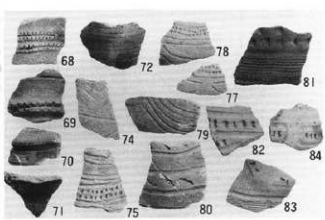

36
37

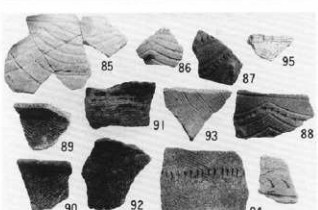

40
41

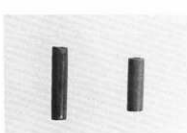
27


43
44
45
46
47
48

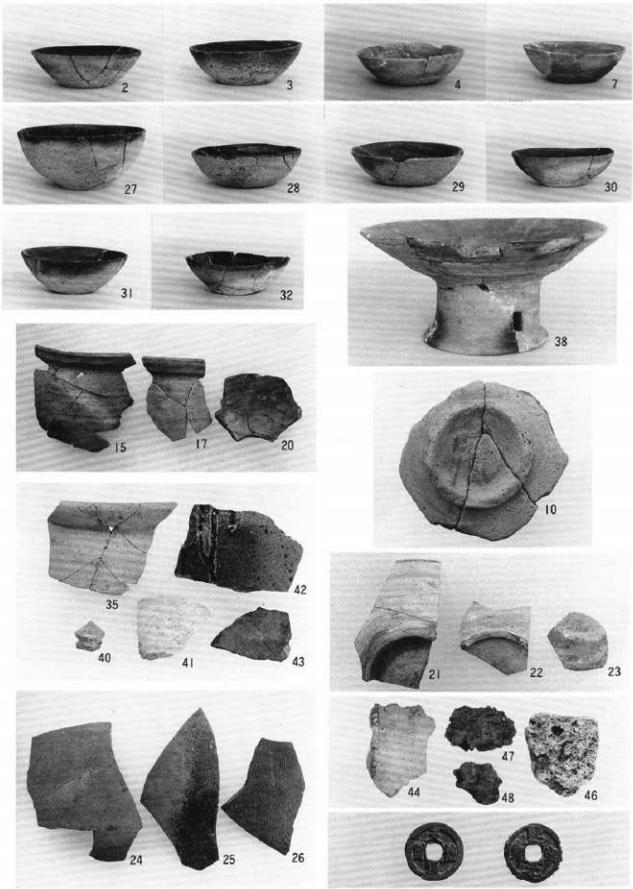
59
60
61
62
63
64
65
66
67


68
69
70
71
72
74
75
77
78
79
80
81
82
83
84


85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95



▲ 弥生時代土器・管玉



▲ 平安時代の土器・陶器・土製品・鉄滓・軽石　銭貨

飯山市埋蔵文化財調査報告書　第39集

上　野　遺　跡　V

平成6年3月10日　発行

編集・発行者　飯山市大字飯山1110－1
飯山市教育委員会

印　刷　所　飯山市大字常盤5733－1
㈲岸田孔版印刷所